第71回 “社会を明るくする運動”

作文コンテスト

主唱／法務省

～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～

“社会を明るくする運動” 中央推進委員会
更生保護法人 立川更生保護財団

第71回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

令和３年12月24日　法務省

法務大臣賞表彰式

（前列右から）
法務省保護局長　宮田　祐良
日本ＢＢＳ連盟会長　今福　章二
中学生の部　受賞者　鈴木　心晴
法務大臣　古川　禎久
小学生の部　受賞者　川本　一翠
日本更生保護女性連盟会長　千葉　景子
全国保護司連盟事務局長　吉田　研一郎

（後列右から）
鈴木さん御家族
川本さん御家族
法務省大臣官房秘書課長　丸山　嘉代

（敬称略、所属役職等は表彰式当時）

小学生の部　法務大臣賞　授与

中学生の部　法務大臣賞　授与

はしがき

法務省が主唱する〝社会を明るくする運動〟は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と犯罪や非行をした人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全で安心な明るい地域社会を築くための全国的な運動です。

その中でもこの作文コンテストは、本運動の一環として、次代を担う全国の小・中学生に、日常の家庭生活や学校生活の中で体験したことを基に、犯罪・非行のない地域社会づくりなどについて考えたことや感じたことを作文にすることを通じ、本運動に対する理解を深めてもらうことを目的としております。第43回（平成五年）運動から始められ、今回で二十九回となりました。

令和三年の作文コンテストには、全国から小学生の部一二二、九〇九点、中学生の部一六八、七二九点、合計二九一、六三八点の応募がありました。応募作品については、各都道府県推進委員会の選考を経て、中央推進委員会で審査した結果、法務大臣賞をはじめとして、小学生の部十六点、中学生の部十六点の入賞作品が決定しました。

本作文集は、この入賞作品を収録したもので、更生保護法人立川更生保護財団の御協力により制作されました。一人でも多くの人に作文を読んでいただき、児童・生徒の皆さんの思いを犯罪や非行のない地域社会づくりに役立ててもらうとともに、これから応募をされる児童・生徒の皆さんの参考になるよう願っております。

終わりに、この作文コンテストの実施に当たり、御後援をいただいた全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国小学校国語教育研究会、全日本中学校国語教育研究協議会、公益社団法人日本ＰＴＡ全国協議会をはじめ、多大な御尽力をいただいた全国の教育委員会や学校関係者の皆様に対し、深く感謝を申し上げます。

令和四年三月　法務省

〝社会を明るくする運動〟中央推進委員会

目次

最優秀賞（小学生・中学生）

法務大臣賞

「ふつう」を知った日……福井県越前市武生南小学校　六年　川本一翠　6
誰もがつながりを感じられる社会を目指して…宮城県仙台市立幸町中学校　三年　鈴木心晴　9

優秀賞

全国連合小学校長会会長賞

同じ空の下……群馬県渋川市立古巻小学校　六年　ダグラス初加音　12
言葉と思い……東京都豊島区立豊成小学校　六年　長﨑大嘉　15
魔法の言葉……和歌山県紀の川市立川原小学校　六年　袋谷さくら　18

全日本中学校長会会長賞

その言葉、その心で……茨城県土浦市立土浦第四中学校　九年　知本嵩久　21
家族という拠り所……奈良県智辯学園奈良カレッジ中学部　一年　別所優磨　24
明るい社会への第一歩……和歌山県智辯学園和歌山中学校　二年　上野山朋花　27

全国保護司連盟理事長賞（小学生の部）

一人一人が輝く社会へ……宮城県登米市立登米小学校　六年　佐々木美羽　30
見えない非行……京都府精華町立精華台小学校　六年　藤田愛実　33
支え合える世の中へ……鹿児島県鹿児島市立西田小学校　五年　川畑亮翔　36

全国保護司連盟理事長賞（中学生の部）

目の前の誰かのために……東京都港区立三田中学校　一年　山川万輝　38
未来を信じること……福井県越前市武生第二中学校　三年　川本一遥　41
テーブルからの学び……大阪府堺市立深井中学校　三年　中彩乃　44

日本更生保護女性連盟会長賞（小学生の部）

ゴモラの神様……茨城県ひたちなか市立東石川小学校　六年　大友貫嗣　46
心が安らぐ居場所……長野県松本市立寿小学校　六年　石澤侑子　48
そんなつもりじゃなかった言葉……長野県千曲市立東小学校　六年　北島司堂　50

日本更生保護女性連盟会長賞（中学生の部）

社会を明るくするための積み重ね……島根県浜田市立旭中学校　三年　岡山祐子　53
『勇気をくれよ』から祖父に学ぶ……広島県東広島市立磯松中学校　三年　上本沙南　56
あたたかい社会にするために…大分県九重町立ここのえ緑陽中学校　一年　岩下真理華　59

日本ＢＢＳ連盟会長賞（小学生の部）

真っ白……北海道札幌市立篠路西小学校　六年　近藤舞桜　61
人と人とのつながりを大切に……山口県下松市立久保小学校　六年　武智春香　64
みんながつながる社会を目指して……香川県丸亀市立城西小学校　五年　宮脇杏奈　67

日本ＢＢＳ連盟会長賞（中学生の部）

心の色を感じて……北海道東神楽町立東神楽中学校　一年　村上友紀乃　70
もっと見て聞いて……愛媛県西条市立東予西中学校　三年　伊藤暖　73
目が持つ力……福岡県北九州市立南曽根中学校　三年　藤木太基　76

日本更生保護協会理事長賞（小学生の部）

より良い今を重ねて……広島県福山市立神辺小学校　五年　松山葉月　79
非行を防ぐために何ができるか……徳島県美馬市立美馬小学校　六年　原田紘太朗　81
あいさつだけはしっかりと……鹿児島県南九州市立中福良小学校　六年　山村悠斗　83

日本更生保護協会理事長賞（中学生の部）

本当にカッコイイ大人に……青森県むつ市立田名部中学校　三年　髙橋毅颯　86
話を聞いてもらった経験から……宮城県仙台市立第一中学校　二年　小山礼　89
地域の輪を　つながりを……沖縄県与那原町立与那原中学校　二年　儀間そよ葉　92

更生保護法人　立川更生保護財団について……94

第72回〝社会を明るくする運動〟
～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～
作文コンテストのお知らせ……95

お問い合わせ先……96

審査員

（役職名は審査当日のもの）

全国小学校国語教育研究会会長　佐伯孝司

全日本中学校国語教育研究協議会長　勝田敏行

更生保護法人
全国保護司連盟理事長　谷垣禎一

日本更生保護女性連盟会長　千葉景子

特定非営利活動法人
日本ＢＢＳ連盟会長　今福章二

更生保護法人
日本更生保護協会理事長　榊原定征

法務省保護局長　宮田祐良

小学生の部

法務大臣賞（最優秀賞）

「ふつう」を知った日

福井県越前市武生南小学校　六年　川本（かわもと）　一翠（いすい）

「その人と家族とどっちが大事なの。」

姉が祖母に強い口調で言った。

よく聞いていなかったが、祖母が保護司をしていることについて話をしているらしかった。

保護司は、保護観察というのを受けた方をサポートする仕事だ。良いことなのに、いやな言い方をしてい和感があった。

祖母は、保護司に関わる色々な資料を姉の前に置いて部屋にもどった。自分で考えなさいというときの祖母だ。

姉がパラパラとめくりだしたので、一しょに見た。姉は、おこったような顔をしていた。

「良いことなんじゃないの？」

というと、私にも食ってかかってきた。

「犯罪を犯した人と会うってことは、家族にもき険があるってこと。簡単にいいっていうのは、家族を大事にしていないってことだと思う。」

何も言えなかった。急に、姉の方が正しいように思った。

姉にかくれて祖母の所に行った。

「ばぁば、やっぱり少しこわい気がしてきた。」

祖母は、少し困った顔をして、でも、しっかり

と目を見て私に言った。

「一翠は、いややなあって思うことない？目のこととかで、困ったことない？」

私は目がとても悪く、特別な眼鏡をかけているし、そのことでいやな思いをしたことがある。眼鏡を無理矢理外すように言われて、レンズが取れてしまったこともある。その日は、全く周りが見えなくて、ずっと困ったし、ただずっと泣くことしかできなかった。単純な弱い者いじめではないけれど、他の人が分からないことが、本人にはとても大切で、困ることがある。当たり前だと思っている正しさが、正しいとは限らないこともある。知らない間に相手にとって悪いことをしているということもある。

私は、困ったとき、祖母を含め、色々な人に助けてもらってきた。目が悪いと分かったときは、家族中が心配した。複数の病院に行った。小さかったのでよく覚えていないけれど、私は、初めて眼鏡をかけて保育園に行った日、体が固まって、声も出なくなってしまった。母は、私の前では決してなみだを見せなかったが、何よりつらかったと言っていた。でも、保育園の先生方が折り紙で眼鏡を作ってくださり、友達の中でも、「ふつう」に過ごせるようにしてくださった。ご近所の方も、同じような眼鏡のお姉さんがいて、経験を教えてくださった。学校でも同じクラスに眼鏡の友達がいた。色々なサポートがあって、今の私がある。「眼鏡の私」が、「ふつうの私」でいられるのは、私だけでは無理だった。祖母は私の話を聞いて、

「そういうことなんだよ。」

と言った。

祖母がたん当させていただいている方は、祖父と同じくらいの年の方もいるらしい。それでも、時間通りに来ることができなかったり連絡を忘れてしまったりしてしまう。それでも、祖母は、毎回約束して、話を聞く。

「「ふつう」ってとっても大切なんだよ。」

とも言った。たん当している方は、よくわから

ないまま罪を犯してしまった。規則正しく生活をして、仕事をして、家族と暮らす。この「ふつう」を取りもどしていただくための仕事だと思っていると言った。たん当の方のご両親は祖母がうかがったとき、両手をにぎって、「お願いします。お願いします。」と何回も泣きながらおっしゃったそうだ。祖父と同じような年れいのご両親だから、相当年れいが上の方なのだけれど、大切な家族のことを思って、他人である祖母に心からの言葉を伝えてきたそうだ。祖母はいつも言う。

「罪を犯してしまうということは、やはり社会がどこかおかしいということなんだよ。」

正直、罪を犯す人は「悪」としか考えていなかった。もし、自分の大切な人が助けを必要としていたら、全力で助けようと思うし、現に、私も、私のことを大切にしてくださる方のサポートのおかげで、今がある。それはサポートを必要とする方をはあくし、必要な援助をする仕組みがあることが必要だ。

姉が、祖母の部屋に入ってきた。

「悪いことをするために生まれてきた人はいないってこと分かった。ごめん。」

と、姉が祖母に言った。祖母は、

「考えてくれてありがとう。」

とだけ言った。

大切なのは、こういうことなんだと思った。社会全体が関心を持つこと、考えること。全員が不満の無い社会は、正直難しいと思うけれど、それでも、少しでも多くの方が、祖母のいう「ふつう」を感じることができる社会、それが、祖母が保護司をしている希望なんだと思う。私も姉も社会の一員だ。だから、考えることをやめずにいようと決めた。

中学生の部

法務大臣賞（最優秀賞）

誰もがつながりを感じられる社会を目指して

宮城県仙台市立幸町中学校　三年　鈴木（すずき）　心晴（こはる）

今日もまた、テレビや新聞で様々な事件が報道されている。中でも、悲しく恐ろしい犯罪のニュースは、聞かない日はないと言ってもいいだろう。私は、それらを目にするたび、加害者はなんて凶悪で憎らしい人なのだろう、と無条件に嫌悪感を抱いていた。そう、あの本を開くまでは。

この夏休みに、抜けるような青空の写真にひかれ、偶然手にした一冊の本。それは、罪を犯し、奈良少年刑務所に収容されている少年達の詩集だった。

彼らの詩は、私の予想とは正反対に素直な言葉で書かれていた。その中ににじむ後悔や反省には心が揺さぶられた。涙がこらえきれない作品もあった。その真っすぐで、時に優しさあふれる言葉が、強盗、傷害、殺人といった恐ろしい罪を犯した人から発せられたなんて信じられなかった。

それらの詩は、受刑者の立ち直りを目指すプログラムの中で書かれたそうだ。

「ぼくのすきな色は　青色です
つぎにすきな色は　赤色です」

例えばこのように、ある受刑者が自分で書いた詩を発表する。すると他の受刑者が、

「好きな色を教えてもらって嬉しかった。」と感想を伝えるといった内容だ。私は初め、たったそれだけのやり取りに何の意味があるのか全く分からなかった。

読み進めると、その詩を書いた彼は、好きな色を尋ねられたことさえないほどに、誰からも関心を向けられたことがなかったと分かった。皮肉にも、刑務所で初めて気持ちを受け止められ、それが心から嬉しかったと読み衝撃を受けた。さらに、幼稚園や小学校に通った経験がなかったり、大好きな両親から虐待を受け続けたりと、辛く苦しい幼少時代を過ごした人が少なくないことも知った。それがどれだけ寂しく孤独かを想像しただけで、胸が詰まる思いがした。

もちろん、犯罪は決して許されるものではない。しかし、罪を犯すに至るまでの彼らの壮絶な状況を思うと、彼らだけの責任とは言い切れない、誰かが気づいて思いを受け止めていたら、育ってきた環境が少しでも違っていたら、と思わずにいられなかった。実際に、詩を認められて自信を回復し、立ち直っていく受刑者の姿がそれを物語っていると感じた。

今自分の周りを見回すと、家族、友達、先生、困った時に話を聞いてくれる多くの人の顔が思い浮かぶ。思いをぶつけ、互いに許し、笑い合える人がいるその環境が、実はとても幸せで心強いことだと改めて感じた。たった一人でも自分を受け止め認めてくれる誰かがいること、それこそが辛い時でも踏ん張り、前を向くパワーの源になると考えさせられた。

私は、「加害者は劣悪な人」と決めつけていたこれまでの自分を反省した。生まれながらの犯罪者などどこにもいないのだ。罪を犯した彼らの多くが、社会の中で居場所を無くし、隅に追いやられ、疎外感を感じた結果、踏みとどまれずに感情を爆発させてしまったのだと思えてならない。

人と人との関係の希薄さや、人々の無関心さが彼らを追い詰めたのだとしたら、これからは誰も

孤独にさせない、つながりのある社会を作ることが大切だ。それにより犯罪を減らすことだってできるかもしれない。

そのために私達にできることは何だろう。その一つは「挨拶」ではないだろうか。

私の学校でも「あいさつ運動」が行われている。私も実際に挨拶をすることで、初めて言葉を交わす相手との間にも、安心感や信頼感が生まれることが実感できている。

挨拶は、「あなたと仲良くしたい」「あなたに関心を持っている」という大きなメッセージでもあると思う。された側は、「自分の存在が認められた」と感じ、気持ちが満たされていく。一言の挨拶をきっかけに会話が生まれ、そこからよりよい関係につながることもあるだろう。さらに、挨拶にはその場の雰囲気を明るくしたり、笑顔を増やしたりと様々な効果もある。また、挨拶の返答やその表情から、今相手が置かれている状況を想像し、寄り添い、言葉を掛けることだって可能だ。

しかも、人と人とをつなぐその方法は、僅かな心掛けと、ほんの数秒の時間さえあれば、誰にでも簡単に実行できるのだ。

私は今、相手に伝わる挨拶ができているだろうか。まずは自分から、家族、学校、地域の中で、自分の心を開き、気持ちを届けられるような挨拶を心掛けよう。

小さな心掛けが社会全体に広がって、全ての人が「自分は社会の大切な一員だ」とつながりを実感できるようになったら嬉しい。そしていつか、刑務所さえも必要なくなるような、そんな明るく温かい社会になる日が来ることを願っている。

小学生の部

全国連合小学校長会会長賞（優秀賞）

同じ空の下

群馬県渋川市立古巻小学校　六年　ダグラス　初加音（はがね）

「なんだか、こわいなあ。」

レンガでできた高く厚いかべで囲まれ、重そうな鉄の門が閉められた建物の前を通るのが、幼稚園の頃の私は苦手でした。その建物がある通りの先には、かわいらしい雑貨屋さんや、学校があるのに、その赤茶色のかべの建物の周りだけ雰囲気が全く異なり、どんよりとした空気が流れているかのようでした。そんなある日、買い物に行く途中で、いつものように、赤いレンガのへいの前を通りかかると、お母さんが突然、

「ここは、刑務所だよ。」

と、こともなげに言いました。その言葉を聞いて、私が感じていた説明できない不安な気持ちが理解できた気がしました。でも、お母さんのあまりに自然な、私の持っていた感情とは反対の態度に少し混乱もしました。

「刑務所＝悪い人が行く所」「悪い人＝怖い人」と思っていた私は、お母さんの態度に疑問を感じつつも、特に深く考えることなく小学生になりました。

三年生になると、学校で万引き防止講座が開かれました。そこで私は、「刑務所に入っている人

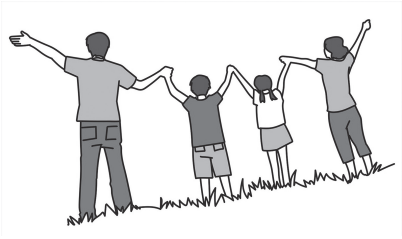
たちは、自分の犯してしまった罪をつぐなっている人たち」であるということを学びました。その時、今まで私が抱いていた刑務所や、そこにいる人たちに対する印象は、私の理解不足からきた「偏見」だったと、はっとしました。それからは、前橋刑務所の前を通っても、幼い頃感じていた怖さは感じなくなりました。そして、気付いたことがありました。それは、刑務所には、高いへいや頑丈な門はあるけど、その上をおおうものはなく、その上に広がる空は、私が見ている空と同じ空ということです。そのことに気付いた時、あの日のお母さんの姿を思いうかべました。刑務所の中にいる人も私たちと同じ「人」であるということ。どこかで違う道を選んでしまったけど、私たちと変らぬ「人」であると、お母さんは考えているのだと分りました。では、なぜ刑務所にいる人は、「犯罪」という選択肢を選んでしまったのでしょうか。

私は、そこには、「環境」が関係していると思います。そう考えるようになったのは、大阪市にある大空小学校の元校長先生をされていた木村先生の講演を聞いてからです。その中で家庭環境に恵まれず、学校で問題を起こしていた男の子の話がありました。先生をはじめ、友だちや地域ボランティアの人たちに、彼の存在をそのまま受け入れられ始めると、徐々に彼の問題行動は減っていったそうです。が、しかし、ある日彼は、数日間何も食べる物がなく、空腹のあまり、遂には、コンビニエンスストアから、おにぎりを一つ盗んでしまいました。偶然それを目にした地域の人は、先生に、

「どうして、自分たちは、あの子がそこまで追いつめられるまで気付けなかったのか。」と相談に来たと言います。その後、真っ青な顔した彼も、「とんでもないことをしてしまった。」と校長室へやってきたそうです。彼は、そうするしかない環境におかれていたのだと思います。犯罪、非行という道を選んでしまう時、最後に背中を押してし

まうのは、環境だと思うのです。しかし、彼を救ったのも、また環境でした。彼が自分の犯した誤ちに気付いて先生に正直に話せたのは、自分が受け入れられていると、感じられる環境があったからだと思います。ありのままを受け入れ、自分のしてしまったことは正しくないけど、自分を否定することなく、一緒にお店へ謝りに行ってくれた先生や、自分を受け入れ、心配してくれる人々を目にした彼は、二度と同じ間違いはしないでしょう。

私も、この夏休み、ささいなうそをついてお母さんに叱られました。散々叱った後で、お母さんは、私に、「うそをつくことは悪い。だけど、それは、あなたが悪い子、という訳じゃない。」と言いました。私には、こうして受け入れてくれる人、環境があります。受け入れられていると思うと、安心します。それは、もし間違った選択をしてしまっても、また元の道へ戻ることができる、という安心感につながっています。人は、置かれた状況によっては、判断を誤ってしまうこともあります。しかし、受け入れられている、と思える環境があることで、再度歩み出せるとも思います。誰もが他者を受け入れることで、誰もが受け入れられる環境を作ることが、非行や犯罪のない明るい未来につながっていると信じ、私も社会の一員として、周りの人を受け入れようと思います。同じ空の下みんなが幸せに暮らせる明日を築くために…。



小学生の部

全国連合小学校長会会長賞（優秀賞）

言葉と思い

東京都豊島区立豊成小学校　六年　長﨑（ながさき）　大嘉（たいが）

小学校に入学してすぐのことです。友達からいやな言葉を言われ、カッとなってしまい、思わず手が出てしまったことがありました。その場で担任の先生に注意され、友達にもあやまって許してもらいました。ぼくはなみだが出て止まりませんでした。

なみだの理由は二つありました。一つは、友達をたたいて痛い思いをさせてしまい、もうしわけなかったから。もう一つは、なんでぼくはその場ですぐ言い返すことができないんだろうと、くやしさを感じたから。

学校までむかえに来てくれたお母さんにもおこられました。大嘉はなんでいつも手を出すの。大嘉はなんでいつも言い返さないの。大嘉はなんでいつも……。

「ぼくもこまってるんだ！」

ぼくがなんとか言葉にすると、お母さんはもう問いつめてきませんでした。

友達に何か言われたときに、ぼくも何か言いたいという気持ちは強くありました。いやな言葉を言われたときに言い返すだけではなく、「おはよう」と言われたら「おはよう」と言う、「これ貸

して」と言われたら「いいよ」と言う、こんな簡単なことが、ぼくにはむずかしかったのです。

お母さんは、ぼくが言いたいことがあるのに言えなくて困っているという悩みを、真剣に受け止めてくれました。話し合った結果、ぼくは二学期から池袋小の「ことばときこえの教室」に通うことになりました。

週に一回二時間、豊成小にある自分のクラスをぬけて、ことばの教室に通わなくてはいけないことを、担任の先生がクラスのみんなに話してくれました。

「泳ぐのが上手になりたくてスイミングに通う子がいるように、長﨑さんも言葉が上手になりたくてことばの教室に通います。授業中にいないことがあるけれども、みんなで応えんしましょう。」

先生のお話のおかげで、ぼくがことばの教室に通うことを悪く言ってくる友達はいませんでした。みんな応えんしてくれたのです。

その後、ぼくは「ことばときこえの教室」に二年間通いました。行きはお母さんが教室まで送ってくれて、帰りはおばあちゃんがむかえに来てくれました。ことばの教室の先生達はとても優しくて、いつも明るく声をかけてくれました。先生方が熱心に指導してくださったおかげで、ぼくは会話のやりとりがスムーズにできるようになったのです。

ぼくは、この経験から三つのことを学びました。自分のことを知ること、相手のことを思いやること、感謝の気持ちを持つことです。

人にはそれぞれ得意なことと苦手なことがあります。好きなこともきらいなこともあるし、簡単にできることもむずかしいこともあります。まずは、それを理解することが大切だと思います。

ぼくは言葉のやりとりが苦手で、感情的になってしまうところがありました。そんな自分がいやになり、ここからいなくなってしまいたいと思うこともありました。

しかし、そういう自分を知ることが、初めの一

歩だと思うようになりました。ぼくは正義のヒーローのように強くて、人を助けられる完ぺきな人間になりたいという目標があります。でも、自分はまだまだ完ぺきな人間ではないのだと認めることも、大事なことだと思いました。

そして、自分がつらい経験をしたことから、同じようにつらい思いをしている人を思いやる心を持ちたいと思いました。相手の気持ちに寄りそって、自分の言葉や行動で傷つけないように、常に思いやりの心を持って接していきたいです。

さらに、ぼくがたくさんの人に声をかけてもらい、支えてもらったことから、感謝の気持ちを忘れないようにしたいと思いました。学校の先生やクラスの友達、家族に対して、常に感謝の気持ちを持ち、何かしてもらったときに「ありがとう」をきちんと言えるようになりたいです。

今、世の中は新型コロナウイルスの流行によって、大変な日々が続いています。テレビのニュースを毎日見ていて、ゆううつになることもありますが、一人一人が自分と向き合い、相手を思いやり、周りの人に感謝の気持ちを持っていれば、社会が明るくなっていくと、ぼくは信じています。

小学生の部

全国連合小学校長会会長賞（優秀賞）

魔法の言葉

和歌山県紀の川市立川原小学校　六年　袋谷（ふくろや）　さくら

「いつもありがとうございます。」が私の祖母の口ぐせです。祖母はお話が大好きで、とても聞き上手です。私は祖母と話をすると、楽しくていつも笑顔になります。少し気持ちが落ち込んでいたり、嫌だなぁと思っていても、祖母と話をしているとすぐに忘れて、気持ちが楽になります。だから私は祖母が大好きです。

そんな祖母は、長い間保護司をしていました。保護司ってどんな仕事なんだろうと思い聞いてみると、「社会を明るくする運動」の冊子を見せてくれました。社会を明るくする運動は、犯罪や非行のない明るい社会の実現を目指す地域の人々の熱い思いにより自発的に生まれた活動の事とありました。すべての人々に犯罪や非行の防止を呼び掛けるとともに、罪を犯した人たちの更生について、人々の理解を深め、それぞれの立場で力を合わせ、犯罪や非行のない明るい地域社会を築こうというものでした。私には少し難しくて、よく分からなかったので、祖母にいろいろ聞いてみることにしました。

祖母が保護司になったきっかけは、祖母の中学校の担任の先生の推薦だったそうです。当時祖母

の住む地区には保護司が少なく、その先生が保護司として長年勤めていたそうです。

私は祖母の保護司としての体験談を聞いてみました。祖母の初めの言葉は、「保護司を始めて、対象者さんやその家族からの出会いでうれしかった事や勇気づけられた事がたくさんあった。」と話してくれました。保護司を始めたばかりの頃に受け持った対象者さんが無事に観察期間を終えた時は、「良かった、おめでとう。」と喜び合ったそうです。その後も、結婚相手を連れて報告に来てくれたり、子供が生まれたと顔を見せに来てくれたり、二十年近く毎年届く年賀状や暑中見舞いのお便りは祖母を大変勇気づけたと聞きました。

またある対象者さんは、保護観察期間中に魚釣りに目覚めて、ある日立派なはまちを釣ったと持ってきてくれたそうです。観察期間が終わった日の帰り際には脱帽して、「ありがとうございました。」と一礼してくれた姿が印象的だったと話してくれました。祖母は保護観察が終わった事より、人に対して「ありがとう。」と礼を尽くす事が出来るようになった事に感動したそうです。

保護司をしていて気を付けていた事も聞いてみました。様々な対象者さんがいるので、それぞれの家庭環境やおかれている状況をよく考えたと言っていました。また、対象者さんが面談に来やすいように、来た時に話しやすいような状態に出来るようにいろいろ工夫したと聞きました。祖母はいつも笑顔で聞き上手なので、来た人は話しやすかっただろうなと思いました。

祖母の話の中で、「その人の気持ちの中にあるものをどうやって外に出してあげられるか、どうやってその心の中に入っていくかをよく考えた。」と言っていました。私も学校や家で、友達や家族とぶつかることがあります。その時、その人の気持ちになって考えているかなぁと改めて思いました。私は自分の気持ちばかりぶつけていたように思います。もう少し、相手の気持ちになって考えられるようにしたら、きっとケンカも減って、優

しい気持ちになれるような気がしました。

「いつもありがとうございます。」祖母がいつもみんなにかけるこの言葉を思い出しました。祖母は私たち家族にもいつも同じように声をかけてくれます。すると父や母は「こちらこそありがとう。」と言います。ありがとうの連鎖でみんな笑顔になります。ありがとうは魔法の言葉です。だから私は、ありがとうという言葉を大事にしたいなぁと思いました。一人一人の「ありがとう。」という気持ちが相手に伝われば、自然と周りも明るくなり、家族や友達も明るくなります。相手に対して思いやりの気持ちを持つ事を大切にしたいと思いました。そして、私も祖母の様に、いつも笑顔で明るくみんなに「ありがとう。」と言えるようになりたいと思いました。それが私の社会を明るくする運動の第一歩です。

中学生の部

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

その言葉、その心で

茨城県土浦市立土浦第四中学校　九年　知本（ちもと）　嵩久（たかひさ）

「今日、学校どうだった？」

僕は毎日家族にこう聞かれます。時にはそれがめんどくさいと感じる事もあったし、うるさいなあと思った事もありました。僕にとってそれはきっと日常的すぎて当たり前のことだったのでしょう。しかし、その当たり前だと思っていたことが当たり前ではなく、とても大切なことだったのだなあと実感した日がありました。

それはまだ僕が小学生のときでした。その日はトラブルに巻き込まれて落ち込んで帰宅しました。家に帰ると、毎日当たり前だと思っていた「今日学校どうだった？」という言葉に僕は心が熱くなり涙を流しました。実はその日、同じ学年のよく問題を起こしていたグループの子達に、同じグループに入るように勧誘をされたのです。しかし、僕はその子達が起こしている問題で、どれほどの人達が迷惑を被っていたかを考えると、絶対に入りたくないと思いました。また、過去にはそのグループの何人かに怪我をさせられた事もあり、親がどれだけ心配したのかを考えると、僕はそのグループに入ろうとは考えられませんでした。しかし、その勧誘を断るだけでそのグループの子達が

納得するはず無く、僕はターゲットになってしまいました。実際その勧誘を断りターゲットにされるのが怖くて、そのグループに入った友達も何人かいました。断ってからの僕の毎日は地獄のようでした。何か問題が起これば全て僕のせいにされたのです。物が無くなった時は僕が盗ったと犯人にされ、煩くしていた子を注意すれば顔を殴られ眼鏡を割られました。助けを求めた当時の担任は、その子達の話だけを信じ、全て僕が悪いと決め付けました。何度勧誘を断った事を後悔したか分かりません。そのぐらい状況は過酷で毎日が辛く、神経が休まる事はありませんでした。そんなある日、僕はそのグループの一人に脳震盪を起こす程何度も殴られ壁に頭をぶつけられました。僕は翌日から学校に行けなくなりました。母は泣きました。これからどうしていこうかと家族で話し合っていた時、家のチャイムが鳴りました。ドアを開けると校長先生が立っていました。

「先生と一緒に学校に行こう。先生が守るから。」

突然の訪問に僕は驚きました。校長先生から事情を聞いた僕は嬉しくて涙が止まりませんでした。なぜなら、校長先生はグループの子達や担任の先生の話だけを信じるのではなく、僕が今までされてきた事をしっかりと把握してくれていたからです。また、僕の精神的なサポートをしながら僕の家族は、学校に何度も足を運んでいたという事も校長先生から聞きました。これ以降僕は少しずつではありますが、徐々に自分を取り戻すことができました。その後も嫌がらせや非行に繋がるような悪い誘いも受けましたが、決して一人ではないのだという安定した気持ちや、見守ってくれている周りの人達のおかげで、自分を見失う事なく、自分の信じた道を曲げずに進んでいこうと決心し、現在も努力し続けています。

　この経験から僕は、犯罪・非行のない地域づくりを実現させる為には、家族やその地域の人達が自分の子供や近所の人達を優しい気持ちで見守り、犯罪・非行をした人達、又はその可能性のあ

る人達を見捨てない気持ちを持ち、コミュニケーションをとる事が重要だと考えています。コミュニケーションとは犯罪・非行のない地域づくりを実現させるための第一歩なのです。

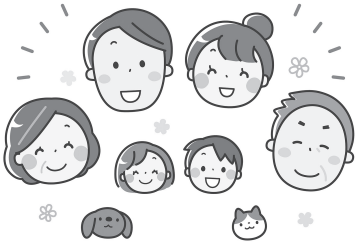
どんなに元気そうに見える人間でも、実は悩み苦しんで泣きたくなるような毎日を送っている事もあります。そこで自暴自棄になって罪を犯す事だってあるかもしれません。その悩みが深ければ深い程、平気なフリをしている事だってあるのです。だからこそ、ちゃんと見てるよ、ちゃんと気にしているよというメッセージを送る事はとても大切な事なのです。

「最近どう?」「何かあったらいつでも話してね」「今日学校どうだった?」「大丈夫だよ」僕はたくさんの言葉をもらい、救われました。そして目を逸らさず向き合ってもらえた事はとても幸せな事だと思っています。

僕は現在、学校の先生になりたいと思っています。これからの子供達を支え、犯罪・非行の誘いから守る事、その可能性にいち早く気がつき、守り、向かい合ってあげたいです。

「今日学校どうだった?」

今の僕は、その言葉を毎日かけてくれた家族に心から感謝しています。



全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

家族という拠り所

奈良県智辯学園奈良カレッジ中学部　一年　別所（べっしょ）　優磨（ゆうま）

僕は母と妹の三人で暮らしている。母は泊まりのある仕事をしていて、泊まりで帰ってこない日は、近くに住む祖母に助けてもらいながら生活をしている。年末年始等には東京から母の姉夫婦が帰ってきて、僕や妹と一緒に遊んでくれる。これが僕の大切な家族で、僕が小さい頃からずっと側にいて見守ってきてくれた。だから、今の僕がある。

僕が考える明るい社会とは、家族という人間にとって一番核となる社会環境が充実している社会だ。なぜなら、人間としてこの世に生を受け、初めて知る社会が「家族」でありそこでの日々の積み重ねがその人の人格形成や考え方、生き方に多大な影響を及ぼすからである。

僕が考える家庭環境の「充実」には三つの要件がある。

一つ目は、「心安らげる場所であること」である。

最近、ＤＶや児童虐待、高齢者虐待などの身近な社会での犯罪に関するニュースが後を絶たない。家族という最も安心でき、心安らげる場所であるべき社会環境の中で暴力等の不安に怯えなが

ら暮らしていると、必ずいつか心が悲鳴をあげ、心身に何らかの不調を来たしてしまうに違いない。

先日起きた電車内での殺人未遂事件の犯人は、逮捕後、「幸せな女性を見ると殺してやりたくなる。」等と話していた。凶悪な事件を犯したこの犯人も、初めからそんな考えを持っていなかったはずで、何かきっかけとなる出来事があったから、そのような考えを持つようになったのではないだろうか。そのきっかけが何か僕には分からないが、犯人に荒んだ心を和ませてくれる居場所があれば、結果は変わっていたのではないかと思う。

二つ目は、「お互いを認め合い、許し合える場所であること。」

僕は家で手伝いや勉強をせずにいて母にきつく叱られたり、言い合いになることもある。でも、少し時間が経てば、母はいつも通り僕に笑顔で接してくれるし、変わらず美味しいご飯を作ってくれる。母は僕が失敗をしても笑い飛ばしたり、アドバイスをくれたりして、いつも僕を見守り、励まし、味方でいてくれる。これが僕の家族だ。

人は誰しも失敗をする。大事なのは失敗をした原因を考え、同じことを繰り返さないことだ。その時、周りの助けが必要であれば、お互いに助け合ったり、手を差し伸べ合えるのが家族の良さだ。失敗から立ち上がり、一歩踏み出せるのは、勇気と周りの人の支えがあるからこそである。

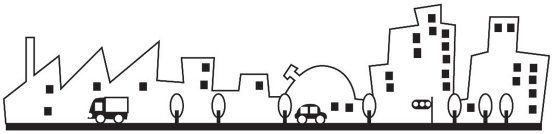
三つ目は「感謝の気持ちを忘れないこと。」である。

僕はまだ子供で、今は日々、祖母や母に助けてもらってばかりいる。でも、それを決して当たり前と思わず、感謝の気持ちを忘れてはいけない。なかなか面と向かって言葉では伝えられないので、僕はなるべく「ありがとう」という言葉を口にするように意識している。母も、僕が手伝いをすればいつも「ありがとう。」と言ってくれる。家族であってもお互いに感謝する気持ちを忘れて

はいけない。僕が考える「充実」は社会の枠組みが大きくなっても根本は変わらないのではないかと思う。例えば、家族の次に身近な社会の学校でもこの三つの条件は当てはまる。つまり、一人ひとりが安心して学べる居場所であること、お互いに認め合い、高め合える場所であること、そして属する人々お互い感謝の気持ちを持つこと、この三つがあってはじめて皆が充実した学校生活を送れる。

もっと大きな枠組みの日本社会でも同じことが言える。一人ひとりが心の拠り所を持ってお互いに認め合い、許し合い、立ち直りを支え合える社会、そして感謝の気持ちを忘れない社会であれば、犯罪や非行も今よりずっと少なくなると僕は考える。そして、この三つの条件を成り立たせるスタートは家族に他ならない。

今の時代、家族の形は人それぞれで必ずしも血のつながりがない場合もあるかもしれない。でも、一人ひとりが家族と言える存在の人や居場所を持てることが大事ではないだろうか。人は一人では生きてはいけない。三つの条件を満たす「家族」という場所を拠点に一人ひとりが自分の夢や希望に向かって前向きに生きていける社会になれば、社会はより明るくなるのではないかと僕は考える。



中学生の部

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

明るい社会への第一歩

和歌山県智辯学園和歌山中学校　二年　上野山（うえのやま）　朋花（ともか）

プルルルルルー。静寂のなか鳴り響く電話。深夜0時。警察から電話がかかってきた。

「お宅の自転車が盗まれました。」

え？そんなはずはない。私の自転車は庭の駐輪場にいつもどおり止めたはず。そう思って見に行くと、普段置いてあるところから私の自転車だけが確かになくなっていた。詳細を聞くと、どうやら市内に私の自転車に乗っていた人がいたらしい。その人は私と同じ姓を名乗ったそうで、知り合いかどうかを聞かれた。でも私はその人のことは知らなかった。その人は、咄嗟に自分を私の家族だと思わせようと、偽名を使ったようだった。私はすごく動揺した。最近自転車泥棒が多いという話は聞いていたが、まさか自分の身に起こるとは思っていなかった。さらに詳しく聞いていくうちに、だんだん驚きとともに怒りが湧いてきた。どうしてこんなことをするんだろう…、自分が大切に使ってきた自転車を勝手に使われていたことに対して頭に血がのぼった。以前から、夜にはほとんど乗っていないはずなのに、ライトの減りが早いなとは思っていた。もしかしたら、初めてではないのかもしれないと気付き、毎日何も知らず

にその自転車に乗っていた自分を思い出して、たまらなく悔しくなった。そして自分が起きている間に、家の敷地内に知らない人が入ってきていたことに、恐怖を覚えずには居られなかった。いろんな感情がぶつかり合って、私の目から涙が出てきた。後日父が被害届を出して、自転車は戻ってきたのだが、しばらくはもやもやした気持ちのまま日々を過ごした。

そんなある日。家のインターフォンが鳴らされた。知らない人だった。その人は自転車を盗んだことを謝罪しに来たみたいだった。その人は交通手段が欲しかったために、私の家に自転車があるのを目にして、つい使ってしまったのだと理由を話して、二度としないと約束した。私にはその人が心から反省しているように見えて、ふっと心が軽くなった。今思えば、本当に悪い人であれば自転車を乗り捨ててくるのではないだろうか。それをきちんともとの場所に戻したのは、その人に罪悪感があったからだと思う。私はこの経験をとおして、犯罪をしてしまった人の更生について考えてみた。

毎日のように目にするニュース。そのなかには、思わず目を背けたくなるような痛ましいものもたくさんある。

「こんなことしていいと思ってるのかな。」

みんな口を揃えてそう言うが、果たして本当にいいと思って犯罪に手を染める人がいるだろうか。私の自転車を盗んだ人も、よくないことをしたと感じたから謝りに来たのだろうし、盗んだのにも理由があった。頭ではわかっていても、「ダメだよ！」という心の叫びを越える何かが体を動かし、犯罪や非行をしてしまうのだと私は思う。ただ『悪いこと』をしたから『犯罪者』と一方的に決めつけるのではなく、『悪いこと』をしてしまった理由や経緯も頭に入れたうえで、真剣にその人に向き合うべきではないだろうか。しかし、どんな理由があろうとその人の罪は一生消えない。それは『罪』として認めなければならないと

思う。申し訳ないことをしたと感じるからこそ反省できるし、謝ることができる。謝ることは、明るい社会に戻る第一歩となるだろう。

私たちは、彼らを受け入れることが必要だ。どうしても許せないこともあるかもしれない。でも、その人が心から反省し、更生を望んでいると感じたなら、手を差し伸べるべきだ。過去の過ちからその人を否定して遠ざけ、孤独にすることもまた、『悪い事』だと思う。

私たちは支え合って、協力し合って生きているのだ。誰かが失敗したなら救わなければいけない、助けなければいけない。自分が失敗したなら罪を認めなければいけない、謝らなければいけない。よいことも悪いこともあってこそのこの世界。だからこそ何かを誤った人はみんなで力を合わせて助け、『よいこと』を増やしていけたなら、それは明るい社会につながると思う。

小学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

一人一人が輝く社会へ

宮城県登米市立登米小学校　六年　佐々木（ささき）　美羽（みう）

朝の光を受け、オレンジ色の花を輝かせるマリーゴールド。夏の太陽にも負けまいと、真っ赤な花びらを大きく広げるジニア。どちらの花も、私に笑いかけているようだ。でも、この花たちは、私がいなかったら捨てられるところだった。

この花は、花壇に植えても大きくならないという理由で、母が捨てようとした苗だ。でも、私は、納得がいかなかった。私が種をまき、ずっと育ててきた苗だった。他の苗と同じように芽を出し、花を咲かせたのに、なぜ、小さな苗は、だめなのだろう。小さい花は、このまま本当に大きくならないのだろうか。そう、心に引っかかった私は、花壇からはじかれた小さな苗たちを、別の鉢に入れて育てることに決めた。

苗の大小で優劣を決められないのは、人間も同じではないかと感じた体験が私にはある。

それは、刑務所作業製品展示即売会を見に行ったときのことだ。そこで、展示販売されていた家具や日用品は、刑務所に入っている人達が作ったものだ。どれもすばらしかった。はじめは、受刑者のことが理解できなかった。受刑者の気持ちが分からなかった。

（こんな作品が作れるのに。才能があるのに。なぜ罪を犯してしまったのだろう。）

しかし、一つ一つの作品を見ているうちに、私は、捨てられそうな花たちと同じではないかと考えた。罪を犯した人たちも、本当は自分だけの輝く花を持っていたはずだ。でも、それは小さな花だったかもしれない。たくさんの人が咲かせる花に埋もれ、自分だけが輝く場所を見つけることができなかったのかもしれない。小さく咲く花は、はじかれる。みんなに認めてもらえず、自分だけの花を自分自身で認めることもできず、罪を犯してしまったのかもしれない。

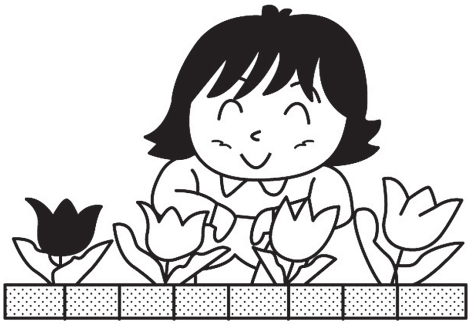
犯罪は許されない。決して許してはならない。しかし、罪を犯した人も、小さな苗と同じように、一つの大切な命であることに変わりはない。自分の犯した罪を償い、また自分の花を咲かせようと、作品を制作しているのではないか。もう一度、社会に戻り、今度こそ、自分が輝ける場所を探そうとしているのではないか。ていねいに仕上げている一つ一つの作品から、そういう受刑者の気持ちが見えてくるような気がした。

令和二年度の犯罪白書を調べてみると、刑法犯として検挙された人数は、全国で一九万二六〇七人。そのうちの約半数が、再び犯罪に手を染めてしまった人達だ。そして、年々、検挙数のうち、再犯者率は増加している。原因はいろいろあると思うが、その一つに、やり直して頑張ろうとした人を社会が受け入れず、拒絶された末に、犯罪に走ってしまうということがあるのではないだろうか。花壇に入れられなかった小さな花たちのように、前科があるというだけで、社会からはじかれ、希望を失い、自暴自棄になってしまったのではないだろうか。このままでは、私達の社会は、悪循環に陥り、誰も満たされず誰も幸せになることができない道へと進んでいくことになるのではないだろうか。

そんな社会にならないように、小六の私にもできることはないか考え、実践していこうと思っ

た。それは、人とのかかわりの中で、どんな人でも初めから否定的な見方をしないことと、努力している人をしっかりと認めて励ましてあげることだ。私にできることは小さいことかもしれないが、たがいに認め合える社会を作っていきたいと思う。

一人一人輝く場所は違う。私が育てた花のように、大きな花壇ではなく、小さな鉢に咲く花でも輝く場所を。この夏、小さかったあの花たちは、鉢の中ですくすく育っている。小さいけれども、立派な花を咲かせている。



小学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

見えない非行

京都府精華町立精華台小学校　六年　藤田（ふじた）　愛実（あみ）

テレビで小中学生に人気のドラマ番組を見ました。その話には非行少年が出てくるのですが、その見た目がありえなくて思わず笑ってしまいました。なぜなら、奇抜な髪型に、制服をダボダボにして着たり、「こんな人いる―？」という容姿でした。しかしとなりで見ていた親は、「昔は非行といえばこんな格好だったよね。今はこんな子を見ることないね。昔は非行がわかりやすく、周囲の大人も気にかけやすかったのにね。」と言っていました。たしかに、私たちの回りにいる非行は、見た目は普通の人と変わらず、何か問題が起きるまでわからないことも多いです。特にそう思うのはＳＮＳに関する犯罪です。私の周りでも小学生だけどスマホを持っている友だちは多いです。ＳＮＳで知り合った友だちを親友と呼ぶ子や、「映える！」と写真をとっては投稿する子がいます。私がスマホを持っていないからか、それらはとても怖く感じます。

私の友だちは、ゲームを通して「さっちゃん」と知り合いました。近くに住む同年代の友だちと言っていたのに実際のさっちゃんはおじさんでした。そして学区まで知られてしまい大変だったと

言っていました。これでは、いつ犯罪にまきこまれてもおかしくないと思います。

しかし、私がもっと怖いと感じたのはスマホが犯罪の意識を低くさせてしまう物だということです。

例えば一つ目は、ゲームのやりたさに親の許可なくスマホゲームの課金をすることです。これは、親の財布からお金をぬすむようなもので、万引きみたいに感じます。

二つ目は、ネットに悪口をかいて拡散することです。これは、悪口をかいたはり紙をはったり、トイレなどの落書きと同じようなものだと思います。

なぜ平気でこのような犯罪といえることをしてしまうのでしょうか。私は、自分の家でスマホで操作するため、指先一つでこれらの行為ができてしまうからだと思います。

親のお金を財布からとる時にはきっと、一度は「悪いな」と思うでしょう。悪口を落書きする時も少しは心がチクリと痛むことがあると思います。ですが、いつでもどこでも指先一つでしゅん時にアクションを起こせるスマホは私たちの良心が痛む時間を与えません。悪いことをしている姿をだれかに見られる心配もなく、自分の部屋で犯罪行為ができてしまうのです。これは罪の意識と罪悪感をグッと下げてしまう、おそろしいことだと思います。

このような一見ふつうのように見える子供が起こす非行はどうすれば防止することができるのでしょうか。それには、「想像力」を育むこと、「自分が大切にされている」と実感できることが必要だと思います。周りから「ダメ」と言ってもらえる機会が減った今、「ダメ」と言えるのは自分自身の心だと私は思います。

私の家には、生まれた時から今までのアルバムがあります。私は、たまにそれを見るのが大好きです。家族のお誕生日には、その人のアルバムをみんなで見ます。なつかしい気持ちと同時に「こ

んなこと、してもらったな。」と私が大切に育てられてきたことを実感します。たまに口答えしてしまう思春期突入の私ですが、それを改めよう、と申し訳ない気持ちになったりします。忙しい中、父が時間を作ってお出かけに連れていってくれたこと、母が作ってくれた行事の時のごはんやお弁当。兄や妹と楽しそうに笑っている私の写真。「幸せだな。」とふだん改めて感じることがない気持ちに気付きます。私を大切にしてくれる人がいるという存在のありがたさ、そしてこの人たちには絶対に悲しい気持ちを、味わってほしくない、という気持ちがムクムクわいてくるのです。この気持ちが非行防止につながるのではないかと思います。

スマホの普及やネット社会の今、便利になった分、非行への扉が身近になってしまっていると思います。だからこそ、相手のことを考える「想像力」と「自分が大切にされているという実感」で自分自身の心を成長させ、「ダメ」と言えるようにすることが非行防止につながると思います。

今後、自分で自分に「ダメ」と言えて、非行の扉を開けないようにすることのできる人が増えていってほしいと思います。

小学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

支え合える世の中へ

鹿児島県鹿児島市立西田小学校　五年　川畑（かわばた）　亮翔（りょうと）

朝、聞こえてきたテレビの音に耳を傾けると、ニュースで事件の報道が流れていた。

「またか…。」

毎日、各地でいろいろな事件が起きていることにうんざりする。さわやかな朝だったのに、僕の心は一気に暗く沈んでしまう。なぜ、毎日犯罪は起きているのだろう。なぜ、人は犯罪を起こしてしまうのだろう…。僕はそれが不思議でならなかった。

この夏休み、東京都世田谷区を走行中の小田急線の電車内で、乗客十人が男に切りつけられるというすさまじい事件が起きた。男は

「幸せそうな女性を見ると、誰でもいいから殺してやりたくなった。電車は逃げ場がないので大量に人を殺せると思った。」

と話していたそうだ。その男の心理は僕には分からない。なぜ、被害者の女性や家族の人生について考えられなかったのか。さらに男は、

「逃げ惑う姿を見て満足したが、一人も殺せなくて残念。」

などとも話しており、この犯行に及ぶことになった経緯については、

「不幸は周りの人のせい。」

と供述している。自分勝手な理由で、どうして人を傷つけられるのだろう。罪を犯したことで、欲求を満たし、本当に人生を納得のいくものにできたのだろうか。僕はいかりがこみ上げると同時

に悲しくなった。

「人格形成」は幼少期の経験が大切だと本で読んだことがある。人は皆、育つ環境が違う。環境が違えば、思っていることや、考え方も異なる。それぞれに考え方が違うことで、良いアイデアが生まれ、素晴らしいものが完成することもある。これとは逆に、考え方が違うことでトラブルが起き、人生のレールを踏み外してしまって犯罪が生まれるのかもしれない。でも、家族や学校の先生、地域住民など周囲の大人、友達の声かけや支えによって気付き、脱線をまぬがれて、犯罪を防ぐこともできると思う。この世界から非行や犯罪をなくしたり減らしたりするには、周囲との人間関係が大切であり、何よりもそこには愛情があることが必要だと僕は思う。

以前、テレビで犯罪者が社会復帰をする番組を見たことがある。社会復帰をする環境や場所に納得がいかないため、再犯率は二人に一人と高いそうだ。自分に歯止めをかけ、過去と同じあやまちをくり返さないためには、地域の人の支えが大切となる。更生保護を支える手立てとして保護司の方や更生保護施設があることを、インターネットを通じて知った。周囲の理解と、「一人ではない、支えてくれる人がいる」といった心のつながりが大切になってくる。

自分が非行や犯罪を少しでも減らすためにできる取組はないだろうかと考えてみた。僕は、進んで元気よく明るいあいさつを地域全体に広げていきたいと思う。あいさつのパワーはすごい。それは、ある小学校を訪れた不審者に出会った小学生が、大きな声で気持ちの良い挨拶をしたところ、そのあいさつに感動し、男は犯罪を犯さなかったと聞いたからだ。あいさつが犯罪を防ぐ「心のつながり」を作ったのだと思う。だから僕は、できるだけ多くの人に気持ちの良いあいさつを届け、心の架け橋のきっかけを作っていきたい。

そして今年、僕は学校で広報委員会の一員として活動している。いつも一年生から六年生まで誰もが楽しめるような新聞記事を書こうと心がけている。僕の小さな活動から少しでも輪が広がり、人がつながり支え合っていける心の架け橋となれたら…。非行や犯罪が減って、安全安心な世の中になっていくために、「僕」ができることから始めていきたい。

中学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

目の前の誰かのために

東京都港区立三田中学校　一年　山川（やまかわ）　万輝（かつき）

テレビでニュースを見ると、連日コロナの話題ばかりである。コロナの感染が拡大しているニュースに加え、それに便乗した犯罪が増えている。コロナに関連した詐欺や、ストレスからの虐待、休業中の店などを狙った窃盗事件や器物損壊事件等が報道されている。コロナ感染拡大のニュースは、私の気持ちを暗くし、少し後ろ向きな気持ちにさせる。それに加えて、このような犯罪を耳にすると、驚き、悲しみと同時に、許せない怒りの気持ちが込み上げてくる。

令和二年四月のコロナ感染対策の為の臨時休校以来、私達はたくさんの我慢をしてきた。学校に行かれず、登校が始まっても行事が次々と中止され、私はストレスを感じた。外出自粛が続き、今まで通りの行動が制限され、時に苛立ちを覚えた時もあった。我慢の限界でもう自粛はせず、マスクもせずに大声を出したい！自分勝手に外を走り回りたい！と思った時もあった。しかし、そのような中、私をはっとさせる出来事があった。

「コロナがゼロになるまで、目の前にいる人達の力になりたい。だから、全力で頑張っているのよ。」と母が看護師の仕事を続ける理由を教えて

くれたのだ。母は現在、コロナワクチン接種の担当をしている。感染者数が減少せず困惑するが、一日も早く、全ての人が以前のように大勢で楽しく食事をしたり、外出したり、安心して生活できることを願い仕事をしているそうだ。母の、「接種を受けに来た人達の気持ちに寄り添い、不安と緊張を和らげるため、優しく対応するよう心掛けているのよ。」という言葉も、私の心に残った。それと同時に、自分のことしか考えられず、苛立っていた自分を恥ずかしいと思った。

また先日、民生委員をしている祖母がテレビのニュース番組に出た。民生委員の仕事を紹介する内容だった。コロナの影響で一年半以上会えていない画面上の祖母は、一人暮らしや高齢者夫婦のみの家を、一軒一軒訪問していた。コロナ禍で困っている事はないかと聞いたり、生活上の相談に乗ったりしていた。

私は、久しぶりに祖母に電話をしてみた。電話越しの祖母の声は、以前と変わらず優しかったが、そこには誰かを懸命に支えたいという意志の強さを感じた。「困っている人の相談に乗り、手助けしたいと思ってね。人と人とが助け合うのは、当たり前のことなんだよ。」と言っていた祖母の言葉が深く印象に残った。また、今は年老いて元気のない祖父の話になった。現在は退任したが、以前は三十年以上、保護司をしていたことを初めて聞いた。祖父は、犯罪をした人や非行のある人が、二度と犯罪や非行をしないように真剣に相談に乗り、一生懸命援助してきたそうだ。

身近にいる母、祖父母が、どのような気持ちで社会に関わってきたのかを、私は知らなかった。三人の思いの深さが伝わり、自分は日常の生活の中で、どのように人と関わり、これからどう生きていくかを見つめ直す機会となった。人は人との助け合いの中で生活している。ふれあいが、人を支え、勇気づける。私もそのように相手の身になって思いやり、優しい心でありたいと強く感じた。そして、その心を行動で表したい。

父は転勤が多く、私は今まで幼稚園や小学校を三回、転園・転校した。新しい環境はいつも物凄い緊張と不安で心臓が押しつぶされそうになる。そんな時、誰か一人でも話しかけてくれたり、笑顔で挨拶してくれたりすると気持ちが明るくなった。一人の行動で、救われる誰かがいると実感した。明るい社会とは、誰かのささやかな、でも相手を思った言葉や笑顔から生み出されるものだと感じた。

自分は犯罪や非行のない社会づくりに、何が出来るのだろうか、何を変えられるのであろうかと考えると、消極的な思いになり、立ち止まってしまう。しかし、人は一人でも自分に心から向き合ってくれる誰かがいると、前を向いて進めると思う。罪を犯す人、非行に走る人は、辛さ、苦しさ、寂しさなどを抱え、誰にもわかってもらえない心の闇があるのかもしれない。だからこそ、その人達に温かく、そして真剣に向き合ってくれる人の存在は大きいのではないだろうか。

人を社会の中で孤立させてはいけないと思う。コロナ禍で、人と人との繋がりが希薄になりがちな今、人は共に手を取り合い助け合うべきだろう。私はまだ、医療現場や犯罪者を立ち直らせる場での活動は出来ないが、家族やクラスメイト、自分の周りの人達の心に寄り添い、思いやりの心を持って接することはできる。今、目の前にいる人の為に力を尽くす母や祖父母の姿から学んだことは大きい。自分が関わる誰かが、明るい笑顔と明るい心で過ごせるよう、自分のできるところから優しい心掛けを始めたい。それがいつか、社会に明るさを灯すことに繋がっていくと信じて。

中学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

未来を信じること

福井県越前市武生第二中学校　三年　川本（かわもと）　一遥（いちよう）

「今日、時間通りに来てくれた。」

祖母が、ここしばらくで一番うれしそうにしていた。ただ、時間通りにくるということで、祖母をここまで喜ばせるのは、だれか。祖母が担当している保護観察中の方だ。

祖母は保護司をしている。祖母は担当の方の負担がない場所を選び、出掛けていく。正直辞めてほしいと思っていた。祖母に危険が及ぶ可能性もあるのではないか、犯罪を犯した他者ではなく、私を含めた家族を守ってほしいと思っていた。そして、何かの言葉の続きで本音を祖母に伝えてしまった。

祖母は、一言だけ言った。

「本当に悪い人は、いないんだよ。」

祖母がすべてを語らなかったときには、深い意味があることが多い。自分で考えてみてほしいということだと察した。

保護司のパンフレット、更生保護サポートセンター、社会を明るくする運動、自身で取得した心理学の資格について、祖母は何も言わずに手持ちの資料を置いていった。事例集、関係する団体、知らなかった保護司の存在意義、祖母が担当をす

る保護観察とは何か、そして、保護観察を受ける人の生い立ち。

自分なりの答えを出した。

祖母の言う通りだ。産まれてから罪を犯したいと思っている人は一人もいない。

私と同じような年頃に親から虐待を受けながら働き、幼い弟の面倒と祖父母の介護を抱えていた人がいた。唯一話を聞いてくれた相手にだまされる。罪を償って、今度こそと救いを求めた場所でも、裏切られ、知らぬ時にまた再犯者となる。読んでいて、絶望した。

朝起きて、心地よい衣類を着て、決まった時間に食事をとる。必要な学用品をもって、学校へ通う。友人と話す。先生と話す。部活をする。家族で笑う。就寝する。少しの余暇に使う金銭がある。私が当たり前に与えられているものを手にしていた人はいなかった。人生を諦める気持ちに共感してしまった。

祖母は、何のために引き受けたのだろう。何か感じたのであろう祖母が考えを話した。

不安な気持ちはよく分かる。初めて引き受ける時には、家族に大きな影響を与えることにならないか、かなり長い時間考えた。祖母自身も実の母親を若くに亡くし、世の中を恨んだことも一度や二度ではなかったから。

「自分だったかもしれないと思ったんだよ。」

本当に悪いことをするために生まれてくる人はいない。それが、罪を犯してしまうには、家族、友人、接し、信じてきた何かに裏切られ、絶望し、そのようなことが必ずあったはずだ。そのような人を生み出してしまうのは、その人だけでの責任では決してない。大きな話になるが、社会がどこかおかしいということなのだ。全員が何にも苦労のない社会の実現は、とてつもなく大きな命題だけれども、少しでも社会に希望を持てる「ひとかけら」になりたいと思っているから引き受けた。

私も、当然に与えられているものがなかったら、祖母の担当の方と同じようになっているかも

しれない。今まで担当の方に感じていた恐怖は、自分に向かった。

実は、私もある経験をしている。父が交通事故に遭い、三ケ月入院した。包帯から目だけしか見えない父は、恐怖でしかなかった。妹の手前我慢したが、逃げたかったし、そんなことを思う自分を心から嫌悪した。母は病院と仕事場を行き来し、少しの時間、私と妹の顔を見に帰ってくるという感じだった。ひどく疲弊し、母まで倒れてしまうのではないかという不安と我慢の日々は、本当に心から辛かった。やっと帰ってきた母に恨み言をぶつけたこともあった。このたった三ケ月でも、私は加害者の方を全力で憎んだし、よく分からない怒りを家族に、しかも、一番苦労をしている母にぶつけたりもした。この事柄だけでも、自分には止められない怒りがあり、恐ろしいことを起こしうると実は分かっていたのだと思う。だから、祖母が引き受けることが怖かったのだと本当は分かっていた。自分の悪意と同じような力が向かってくる恐怖におびえていたのだ。

しかし、今は違う。そのおびえる心は自分や他者に向けるのではなく、社会を変える力に変えるのだ。何かのきっかけで罪を犯しただけで、そもそも、その背景から本当に罪深いのは、その人を生み出している、私を含めたこの社会なのだ。

祖母がいつも言うのは、担当の方が、生活を整え、生きる基盤を整え、大切な場所を整えることを手助けする仕事だということ。

時間どおりに来てくれる。たったそれだけのことだけれども、それは、その未来に続いていることを祖母は信じている。私はお会いすることはないけれど、私も、未来を信じたいと思う。そして、今は、祖母の仕事を心から誇りに思っている。

中学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

テーブルからの学び

大阪府堺市立深井中学校　三年　中（なか）　彩乃（あやの）

「これいいでしょ。」
「飾り彫りもあって、高そう。」
「刑務所の展示会で見つけたんよ。」
祖母と母の会話が私の耳に入ってきた。小さい頃から、使っているテーブルセットの話をしていた。私は、ショックを受けていた。刑務所という言葉の衝撃と疑問が頭の中をかけめぐったのだ。
小さい頃から、祖父母の家に行くのが大好きだった。私の誕生日やお正月には、そのテーブルを囲んだ。洋風で光沢があり、品のあるテーブルだ。美しい思い出が、その会話で打ち消されてしまうかのようだった。どうして刑務所で作った家具を買ったのだろう。私のきょとんとした顔に気付いて、祖母が説明してくれた。偶然、広告を見て展示場に足を運んだそうだ。社会復帰した時に、刑務所で習得した技術を生かすことができることを。そして、製品の売り上げの一部が犯罪被害者支援団体の役に立つことを教えてもらった。私は、刑務所は悪であるという偏見を持っていたのだ。法律を犯してしまったら、刑務所に行くということしか知らなかった。その後のことを考えてみたこともなかった。
誰だって生まれた時から悪い人間であったはずがない。何かのきっかけで、犯罪というハードルを飛び越えてしまったのだと思う。罪を償ったのに、無知だった私のような偏見の目で、周りから

見られたら、どんなにつらいだろう。その目が再犯をしてしまう状況に追いやってしまうかもしれない。教室で一人異質物のような目で見られ、休み時間を過ごす自分を想像してみた。きっと逃げ出したくなる。友達とつながっているから、しんどい事も乗り切れる。社会復帰した後、あたたかい目で社会とつながることができたら、つらい事も乗り越え、やり直すことができるはずだ。

私も含め、なぜ偏見は生まれてしまうのか。それは、相手のことを知らないのに、自分のものさしだけで見てしまうからだ。自分のものさしが誤っていることなど考えもしないで。私は、祖母の家具がきっかけで、罪を犯してしまった人の社会復帰について考える機会を得ることができた。学校では、麻薬や万引き喫煙や飲酒について学んだことがある。犯罪や非行からの再出発についても学ぶ機会を増やすべきだと思う。私が偏見を持ったまま大人になれば、子供にそれが引き継がれる。偏見の連鎖が生まれる。偏見が偏見を生む。あってはならないことだ。人間は学ぶことができる。学ぶことによって過去よりも未来を明るいものにできるのだ。そして、教育だけでなく地域のつながりも大切だ。祖母は偶然目にした広告で、刑務所の取り組みに参加できた。

他にどんな取り組みがあるのかインターネットで調べてみた。キャピックという商標があることを初めて知った。家具の他にも、神輿や犬小屋、革ぐつなど、幅広い製品があることにとても驚いた。インターネットでも販売されていた。社会貢献に気軽に参加できてすばらしい取り組みだと思う。

中途半端な取り組みで、細かな飾り彫りがほどこされたテーブルを作れるわけがない。私は、作ってくれた方の一生懸命な取り組みさえも否定してしまったのだ。自分自身がはずかしい。私と祖父母との楽しい思い出が詰まっている素敵なテーブルを作ってくれた人は、どんな人だろう。感謝の気持ちを伝えたい。そして、その方が社会復帰して、もっともっと素敵な家具を作ってくれていたらと思う。私が大人になって家具を買うことになったら、ぜひ刑務所の展示場に足を運びたい。

小学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

ゴモラの神様

茨城県ひたちなか市立東石川小学校　六年　大友（おおとも）　貫嗣（かんじ）

皆さんは、ゴモラを知っていますか。

ゴモラとは、ウルトラマンに出て来る耳が三角で角がはえている特に人気が高い、かいじゅうです。ぼくも好きだったかいじゅうです。そんなゴモラが我が家の神だなからいつも見守っています。

なぜゴモラが我が家にいるのかと言うと、ぼくが三歳のころにさかのぼります。

その日は家族みんなでショッピングモールへ行って、買い物をしたり、途中でウルトラマンショップに立ち寄った後、帰りに、ラーメン屋さんで夕食を食べました。

ラーメンを食べ終わった後にポケットからニコニコしながらゴモラの指人形を出しました。自分では、覚えていませんが当時は、悪い事とは知らずに持って来てしまいました。それを見たお父さんは、急にまじめな顔になって、急いで他の家族を家に送り届けて、ぼくと二人でウルトラマンショップへもどりました。そして、店員さんに、

「うちの息子がオモチャを持って来てしまい大変申し訳ございませんでした。」

と真剣な表情であやまりました。店員さんは、

「子どもがやった事ですから大丈夫です。」
と笑顔でゆるしてくれました。けれど、お父さんは、
「わるい事はわるい事ですから。」
と謝罪をしました。そして、けじめとしてゴモラの代金を払って、二人で頭を下げて家に帰りました。
家に帰ると、お父さんは、神だなの上にゴモラを乗せました。その後、二人で手を合わせました。その時はまだよくわかっていなかったので、
「ゴモラちょうだい」
とお母さんにおねだりをした時に
「それは違うよ。オモチャじゃないよ。」
もう一度、
「ゴモラちょうだい。」
と、しつこくおねだりすると、お母さんは、やさしく言いました。
「かんじがこれから同じ事をくりかえさないように、ゴモラの神様が神だなから見守っているからね。」
と言われました。

これが我が家にゴモラの神様がいる理由です。ぼくは、お父さんからは謝り方について身をもって教えてもらいました。またお母さんから一度間違いを犯しても、同じことをくり返してはいけないと言う事を教わりました。ぼくはお父さんとお母さんから教わった事で今まで大変な間違いを犯す事はありませんでした。ぼくはこの家庭の中で育ってこれて、良かったです。将来子どもが出来たら、教えられるような家庭を作り、出来れば、社会全体でこの様な教えを広げたいです。
六年生になった今もゴモラの神様は、ぼくを見守っています。

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

心が安らぐ居場所

長野県松本市立寿小学校　六年　石澤（いしざわ）　侑子（ゆうこ）

私はある朝、報道番組で犯罪のニュースを聞きました。私は、「きっと何か理由があって犯罪を犯したのだろう、どんな心で生きてこれたのだろう。」と思いました。なぜなら、人はみんな生まれたときにはきれいな心を持っていると思うからです。ではなぜ、人は犯罪を犯してしまうのでしょうか。それには色々な理由があると思います。例えば、貧困や経済的な不安、ストレス、格差、依存、いじめや孤立、学校に行きたくても行けない事や、ぎゃく待などの人間関係があると思います。中でも犯罪を犯す時の心の環境の事が大きいと思います。なぜなら、私はこんな経験をしたからです。

小学生になってしばらくたった頃のことです。私はいすに座って宿題をしていました。その時、まだ小さかった妹がやって来て、「ねーねーねー。」と話しかけてきました。「うっとうしいなあ。」と思ったので、「ほら、あっちに行って。」と合図しました。妹はピタリと動きを止め「お、部屋から出て行ってくれるのかな。」と思いました。しかし、いすに割り込んで来て、険悪な空気がただよいました。さらに、その日の夜、妹がくすぐってきたのです。「やめてー」と言っても聞きません。こらえました。しかし、その日の昼間の出来事が頭にわき起こりました。今までにされたいたずらも思い出しました。ノートに落書きされる、物を取られる、足をふまれる……。ひもに

つながったように次々と頭によみ返り、自分でもどうすれば良いかが分からない気持ちになりました。そして、私はついに妹をたたいてしまいました。すると、妹は私をにらんで、ひざをかんできました。私は「あーあ」とうなだれて、妹は大つぶのなみだがほおを伝っていました。仲良くしたいと思っていたのに、気分が落ち込みました。きっと、犯罪や非行をしてしまった人も、今までに辛い出来事が起きたりあったのかもしれません。心の苦しみがあったのかもしれません。自分を見失い良心はあったけれども犯罪を犯してしまったのではないかと思います。

では、心の居場所をつくるという考えはどうでしょうか。それは人によっては家族だったり、学校、職場、仲間、支えんしてくださる人などの中で育まれる心の居場所です。自分ではどうにもならないことがあります。でも、心に苦しみを長くかかえて、それを解消したりたえたりすることができない時に、人にしっかり聞いてもらうだけでも気持ちが楽になることがあります。支えんをきちんと受けることで負担を減らせることもあります。だから、不安や心配事を相談にのってくれて話を聞いてくれる場所もあると良いと思います。今まで、知らなかった人に適切な支えんを教えてくださる人間関係もあると良いと思います。そこで、不安や心配な事を一緒に減らしていくのです。はげましの言葉をもらえたり、だれかと会話ができる温かい居場所があれば、非行に走る子も減ると思います。

そして、もし私がだれからも相談にのってもらえなかったり、暴力をふるわれ続けていたら、ストレスが増えて、心が限界になり、非行に走ってしまっていたかもしれません。人は人に支えられながら温かい人間関係の中で、前を向いて生きていく力を育むと思います。そのような経験から、再び犯罪や非行におちいるのを防ぐことにつながると思います。だから、犯罪、非行を減らしたり、犯罪をしてしまった人を立ち直らせるには、まず、立ち直りを支える温かい人間関係の中で居場所をつくること、その人の心の苦しみが安らぐ経験をすることが必要だと思います。

小学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

そんなつもりじゃなかった言葉

長野県千曲市立東小学校　六年　北島（きたじま）　司（しどう）

テレビを見ていたら、言われた言葉で怒っている人がいました。言った方の人は「そんなつもりで言ったんじゃないのに、文句を言うなんてめんどくさいヤツだな！悪気があって言ったわけじゃないのに！」と、その人も怒っていました。一緒にテレビを見ていた母が「こんなこと言われたら、お母さんもいやだなぁ。」と言いました。ぼくにはどの言葉がいやな部分だったのか分かりませんでした。だから、ぼくは「そんなつもりじゃなかった言葉について」母にインタビューをする事にしました。

ぼく「そんなつもりじゃなかったけど、悪い言葉ってどんな言葉？お母さんは、いやなこと言われた事ある？」

母「難しい質問だね～。言葉って人によって感じ方が違うものでもあるからね。言った方の人の生き方と、言われた方の人の生き方が違うから、それは本当に難しい。でも、お母さんが今までに言われて悲しくなった言葉はね…」

ぼくには、二才上に姉がいます。名前はももちゃんです。ももちゃんは生まれる時に事故があって、息ができなくなって心臓が止まってしまいま

した。お医者さんが人工呼吸とかをしてくれて生き返る事ができましたが、死んでいた時間が長かったために、脳のほとんどがこわれてしまい、重い障がいが残って寝たきりになってしまいました。

まだコロナの時代じゃなかった時、母はももちゃんと双子のぼく達を連れて、よくスーパーに行ったそうです。車いすに乗った子がスーパーにいる事が珍しかったのか、チラチラと通りすがりの人が見ていきます。何人かの方に笑顔で声をかけてもらったそうです。

「お母さん偉いねえ！こんな子を連れてきて～。大変でしょう？がんばってね！」

「お母さん、こういう子がいてもニコニコしていて偉いね～！もし私だったら、恥ずかしくてとても買い物になんて連れてこられないわ。」

そんな出来事があったそうです。

母「司堂、この言葉の中でお母さんはどこが悲しかったと思う？みんな、優しい、親切な気持ちから声をかけてくれたんだよ。」

ぼく「う～ん…。『こんな子』ってところ？」

母「そうだね、それもあるね…。言葉の難しいところは、そんなつもりじゃないのに無意識にその人が思っている事が出てしまうところかもね。その時のお母さんはちょっと疲れていたのか、言われた言葉を『本当は、障がいのある人は家にでもずっといさせて、かくしておくもんだよ。』って思われてるのかな…と思って悲しくなってしまったんだよ。」

ぼく「それでお母さんは怒って言い返したの？」

母「ううん、笑顔で『ありがとうございます。』って返したよ。」

ぼく「それじゃあ、その人はお母さんを傷つけたことに気が付かないままじゃないの？」

母「確かにそうかもね。でも、通りすがりの人にそこまで説明する気力が湧かなかったんだよ。そのかわり、それからは、良いタイミングで出会った身近な人達には、少しずつ、ももちゃんの事

をわかってもらえるように話をするようにしたよ。」

そんな事を母といっぱい話しました。そこでぼくが思った事は、ぼくも友達を傷つけるような事を知らずに言ってた事があるかなぁ…ということです。母にそう言ったら、

母「そうかもしれないし、これからもあるかもしれないね…でも、これからは、言われたら友達がどう思うかを考えて話せるといいね。それでも、知らずに友達を傷つけてしまったら、その時はきちんと謝ろう。自分の目の前にいる人を笑顔にする事ができれば、きっとその人も誰かに優しくできるよ。」

そう言ってくれました。

「ごめんね…そんなつもりで言ったんじゃないけどごめんね…もしよかったら話を聞かせて。」

これからぼくは、ぼくから優しい気持ちを届けます。

人を思いやって、やさしい気持ちがみんなにうつっていけば、街中の人に笑顔が広がるなぁ、と僕は思いました。

中学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

社会を明るくするための積み重ね

島根県浜田市立旭中学校　三年　岡山（おかやま）　祐子（ゆうこ）

私の住んでいるところの近くには社会復帰促進センターという建物が建っている。その建物の近くには社会復帰促進センターで働いている方やその家族の方がたくさん住んでいる建物があり、私の友達も住んでいるなじみのある建物だ。だが、私はあまり社会復帰促進センターについて知らなかったし、知ろうとも思っていなかった。

私が小学五年生の時、給食で初めて「おコッペ」というコッペパンがでた。私は給食でパンがでるのは初めてだと思った。だから楽しみだったし、嬉しかったのを覚えている。その時たくさんのカメラマンの人や取材をする人、たくさんの人がいて、なぜこんなに人がいるのだろうと、とても不思議だった。そして、いつも通り合掌するときになると担任の先生がこうおっしゃった。

「このパンは社会復帰促進センターの方が作ってくださいました。感謝して食べましょう。」

当時の私にとっては、給食を作っている人以外の人が作ってくれたんだぁというくらいの感覚だった。

中学生になるとおコッペの説明会が行われるようになった。おコッペの説明会は、実際に社会復

帰促進センターで働いていらっしゃる刑務官の方が学校に来ておコッペについて説明するという内容だった。説明の中で一番衝撃を受けた言葉が、「社会復帰促進センターの受刑者が毎月、皆さんにおコッペを作り、届けています。」

だった。この言葉を聞いたとき、受刑者の方が作ったパンは大丈夫なのか、と少し不安を感じたし、怖いなと恐怖も感じた。

そして、説明会が終わったあと、受刑者の方からの手紙に対して、自分が書いた手紙を送る時間があった。ホワイトボードに飾られた、たくさんの受刑者の方々の手紙を見にいくと、温かい言葉のものばかりだった。私達の年と同じくらいのお子さんがいる人や、毎月私達が楽しみにしてくれると思いたくさんの量を喜んで作ってくださっている人、頑張って作ってくださる人、そんな方がたくさんおられた。私は受刑者の方を、心の中で怖い人で近付きたくないと、勝手に思っていた。そう感じている人も少なくないと思う。

しかし、本当は社会にでたときに、仕事にすぐ就けるようにと、これからのことをしっかり考え、今も頑張って日々おコッペを作っている。また、それ以外にも社会復帰促進センターでたくさんのことをのりきり多くの事に挑戦し頑張っているはずだ。また刑務所や社会復帰促進センターで日々罪を償いながら過ごし、世の中に復帰していると思う。説明会の中で刑務官の方が、こんな言葉を言われた。

「受刑者が社会復帰したとき、その人と家が近所になったりしても、決して避けないでほしい。普通の人と同じように、挨拶をしたり会話をしたり接してほしい。そうするだけで再犯率はぐっと下がる。」

この言葉を聞いたとき、考えるとたしかにそうだと感じた。もし、自分が刑務所からでて人生をやり直そうと決心したのに、周りの人に避けられ、また陰口を言われていると感じたら、どんな気持ちになるのだろうか。きっと、再び刑務所に行く

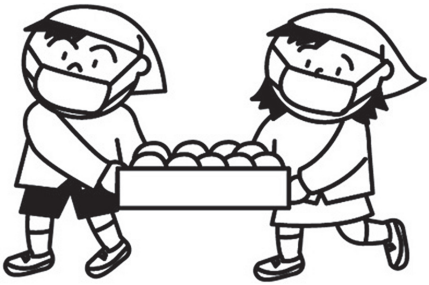
方が楽だと思うと思う。また、仕事に行くのや、外に出るのもつらくなると思う。私がその立場ならきっとまた、犯罪に手を染めているだろう。

きっと受刑者の周りのいる人達の態度で、受刑者の方の人生は、良い方向にも悪い方にも傾くだろう。一人が考えを変えるだけで、一人の人生が変わるのなら、絶対に自分の行動、言葉を考え直す必要があると思う。

これは、受刑者の方以外の私達にも当てはまる場面があると思う。例えば、朝、元気のある明るい挨拶をされると、暗かった気持ちも明るい気持ちになる。また辛い時、声を掛け、励ましてもらうだけで心が軽くなり、希望が生まれる。少しの会話の積み重ねが大きな幸せとなる。

自分の一つの小さな行動が積み重なり、そして、その行動につながる人が増えることがきっとこれからの社会を明るくしていく。自分たちの力で社会を明るくしていこう。

自分がそれらの行動のスタートとなろう。



中学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

『勇気をくれよ』から祖父に学ぶ

広島県東広島市立磯松中学校　三年　上本（うえもと）　沙南（さな）

私はこの夏、祖父から手渡された一冊の本を読みました。非行を繰り返した少年の話でした。

その少年は小学生のころから喧嘩ばかりしていました。彼が十八歳になるころには傷害事件で四、五回捕まり、そのうえ他人が盗んで隠していたジョニーウォーカーという高級ウイスキーを軽トラック一台分、仲間と盗み特別少年院に送致されました。このことが決まった時彼の父親は裁判官にむかって言いました。

「私は、息子の教育を失敗しました。私に代わって、この子を鍛えてやってください。」

彼はこれを聞いて、子供を私物化し、自己満足の教育をしたあげく最後には無責任なことを言う父親にあきれたそうです。私はこの言葉を聞いて、もし自分の親がこのようなことを言っていたら彼と同じように感じると思いました。

彼は特別少年院に送致されてもトラブルばかりでした。なぜなら、弱い者いじめをする人たちがいたからです。弱い者いじめというのはどこにでもあります。悪いことをしてきた彼ですが、弱い者いじめをする人を決して許さないという信念をもっていたのだそうです。だから彼は当分特別少

年院から出ることができませんでした。しかし、彼の事をよく思う少年達もいました。彼に助けられたからです。彼はここで生活をしていく中で自分を知らなければ何も始まらないと思い、たっぷりとある時間を使い、自分のことを知ろうとしました。

一年十ヵ月と十日の時を経て彼は特別少年院での生活に終止符を打ちました。

その後、彼は特別少年院での生活で考えたことを生かして仏庭師になりました。彼がその道に進んだきっかけは、特別少年院での一人の先生との出会いです。その先生は、彼の少年院生活をそばで見守り、唯一彼を信じてくれました。先生は彼によく石の話をしてくれ、そこから石の勉強をするようになりました。そこにたどりつくまでにたくさんの苦難がありました。父親に認めてもらえなかったり、少年院出ということで冷たい目で見られたりしました。しかし彼は目標に向かってまい進するのみと常に自分と向き合い道を開いていきました。

彼というのは今年で七十四歳になる私の祖父です。祖父は自分と同じような少年少女のために何かできることはないかと本を書きました。その本は私がこの夏読んだ『勇気をくれよ』という本です。この本は全国少年少女院や海外の少年少女院にまで届けられています。そして、子供達により想いが届くように少年少女院に足を運ぶこともあります。そんな祖父は常に相手の立場に立ち、喜びに感じる言葉は何かを考えて話をしているそうです。この本を通して祖父は私に人生は自分のものであり、時間をどう使うかで人生は変わっていくということ、我欲ではなく相手を思いやる心が大切だということに気付いてほしかったのだと思います。

私はこのことを知って、犯罪や非行をした人だけではなく全ての人が自分自身と向き合い、人を思いやり、どの命も平等であり大切であると考えれば犯罪・非行のない地域社会づくりができると

思います。そして犯罪や非行をした人が立ち直るにはいろいろな人の力を借りながら全てのことに意味があると理解し、前を向いて進んでいくことが大切なのではないでしょうか。より明るい未来・より明るい社会を創るためにまず私は身近な家族、友人、地域の方々に日頃から感謝し、思いやりをもって接していこうと思います。そして自分自身と常に向き合い、目標に向かって一歩ずつ一歩ずつ歩いていきたいです。祖父がたくさんの子供達に勇気を届けたように次は私が誰かのために行動できるような人間になっていきたいです。

自分の過去をさらけ出し、非行に走った人達の立ち直りに活動する祖父を、私はほこりに思っています。

中学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

あたたかい社会にするために

大分県九重町立ここのえ緑陽中学校　一年　岩下（いわした）　真理華（まりか）

責めは受刑者だけにあるのか。

その疑問はずっと、頭から離れないでいた。私は、奈良少年刑務所の受刑者が情操教育の中で書いた詩についての本『空が青いから白をえらんだのです』を読んだ。

以前は「非行」と聞くと、怖かったし、あるいは自分には関係ない、自分はそんな事はしないと思っていた。

この本を読むと、受刑者の背景が少しだけ分かった。親を亡くしたり、虐待を受けたり、親が離婚したり。学校の先生も真剣に受け取めてくれず、逃げ場を失った心は非行に走ってしまう。仮に手を差しのべてくれた大人がいても、薬物の色に染められてしまう。更生して刑務所を出ても、社会から白い目で見られる。それが社会復帰の妨げとなって、再犯に至るケースもある。日本の受刑者の半分以上は再犯者だそうだ。

確かに、償えない罪を犯したのは受刑者。許されてはならない。けれど、その受刑者に罪を犯させたのは、周りの環境や社会なのではないだろうか。

私には両親がいる。虐待も受けていないし、親の離婚はなさそうで、学校の先生もよくわかってくれる。それでも、生きてきた中で「辛い」と感じた事は、数え切れないほどある。受刑者の方が

どれほどの苦痛を感じているかは、想像もできない。それを思うと、犯罪の被害者の方やそのご家族の無念と同じように、胸が痛む。

社会から偏見を受けて、再犯する。この悪循環は、いつになったら絶ち切れるのだろうか。

私は、その答えを「社会全体の目があたたかくなった時」だと思っている。罪を犯した人への偏見や差別がなくなり、そういった方々をあたたかく迎え入れる社会になった時だ。そうすれば、再犯だけでなく、初犯を犯しそうな人の苦しみを聞いてあげられる人がいるのなら、初犯をも未然に防げるのではないか。偏見を取り除くためには、まず知る事が大事だと思っている。受刑者の方の苦悩を知っている人は、果たしてどれくらいいるのだろうか。私は、この詩集を読んで初めて知った。本当の事を知りもしないで、勝手に「怖い」と感じたり、「自分には関係ない」と決めつけたりしていたのだ。事実を見つめる事なしには、何も始まらないし、一人一人が変わらないと社会も動いていかないと思う。

私は、自分自身が悩みを抱え込まずに身近な人に相談したり、周りの人と積極的に会話をして、小さな変化にも気付いて、話を聞いてあげたりできるようになりたい。

私の学校では、今年から「ピア・サポーター」という取り組みが始まった。これは、悩みや困りのある生徒の話を聞いてあげる力を身に付けて活動する生徒の事。夏休み中にピア・サポーター養成講座があったけれど、あまり興味がなかったし、忙しかったので、私は受講しなかった。けれど、この本を読んで支える側の人になりたいと思ったので、次期の養成講座には参加して周りの人の心を軽くしてあげられるようになろうと思う。

非行のない、あたたかい社会にするためには、私達一人一人にできる事がある。身の回りから、あたたかい地域の「輪」を作る事だ。そして、その輪がつながって一つの大きな輪となり、「社会」と呼ばれるようになれば、それが一人残らず入れてくれるならば、もう二度と犯罪や非行は起こらないに違いない。

小学生の部

日本BBS連盟会長賞（優秀賞）

真っ白

北海道札幌市立篠路西小学校　六年　近藤（こんどう）　舞桜（まお）

人は「真っ白」でこの世に生まれてくるらしい。その「真っ白」が時代や環境、私達を取りまく全てのもの達と共にゆっくりと色付いていくのだ。

では、人はなぜ「真っ白」でいられなくなるのだろうか。色付いていく過程で「他人と違う色」に染まっていくのはどんな人物なのだろうか。

母の知り合いに刑務所に入所していた人がいる。

誰にでもとても優しく、面白い人だ。「どうしてこんな人が刑務所に入所していたのだろう。」

私は純粋に不思議だった。犯罪を犯す人は皆悪い事をして簡単に人を傷つけたり裏切ったりする人だと思っていたからだ。私はこの作文をきっかけになぜ罪を犯したのか聞いてみることにした。

「どうして悪い道に進んだの？」私の質問に少しおどろいた顔をして「どうしてだろうね。」と苦笑いした。そして、「自分は小学生の時いじめられっ子だったんだよ。」と話し始めた。

「小学四年生から卒業するまで周りから無視されて生活した。同級生は誰も助けてくれなかったし、何も出来ない自分もきらいだった。

毎日学校に行かなきゃいけないのにどこにも居

場所はなくて誰かに助けてほしかったけどいじめられてることが恥かしくて親にも相談できなかった。そんな時に一人でいる自分に気付いて一緒に遊んでくれるようになったのが二さい上で不良のお兄ちゃんだったんだ。周りはお兄ちゃんを不良と呼んだけど、自分にとっては強くて優しい唯一のヒーローだったんだよ。」と、とても優しい顔で笑った。

私は胸が苦しくなった。もし自分が周りから無視され続けて、「助けて」と言えない真っ暗な時間が毎日毎日続いたらどうなってしまうのだろう。学校というせまい世界が全ての私達にとって学校に居場所がないというのは地ごくだと思う。そして、何より怖いと思ったのは、皆に無視されている誰かの存在に周りが誰も関心を持たずに誰一人救いの手を差し伸べなかった事だ。そんな時に、彼の存在に気付き彼の人間性を肯定して手を差しのべた「不良」は本当にただの不良なのだろうか。周りが「非行少年」と呼んだ人間は、心が折れて孤独だった彼に愛情と居場所を与えたのだ。

「正義」とは一体何のか。

確かに彼は結果、非行に走り罪を犯してしまった。自分の罪に後悔を抱きながらも「お兄ちゃんが悪かったわけじゃないよ。自分を律する事が出来なかった自分が悪いんだ。」と話す彼を見ているとたまらなく複雑な気持ちだった。彼の言葉に迷いがなかったからだ。

社会のルールを犯せば間違いなく犯罪者であり、どんな理由があろうとその罪を消すことは出来ない。

しかし、その背景や加害者の人生にもっと深く視点を変えて、彼等が抱える悩みや問題に心を寄せる事ができたとしたら、彼等にはもっと違う未来、そして人生があったのかもしれない。

私は彼の話を聞いて「自分を律する難しさ」を強く感じた。優しくて思いやりがある人柄を変えてしまうほどの事とは一体どんな事なのだろう。

「理由なんてないよ。ただお兄ちゃんと一緒に同じ事をしていたかっただけだよ。」

あぁ、彼は愛されていたかったんだ。私は切なくなった。自分を認めて大事にしてくれる存在は「悪」だった事に気付きながらも、彼はそこにしか居場所がなかったのだ。こんな小さな理由が人生を狂わせてしまう。自分達の人との関わり方一つで誰かを犯罪者にしてしまうかもしれないだけでなく自分自身もそうだと思った。

もし自分や大事な人の心が今にも折れてしまいそうだったら善悪を見失わずにいられるだろうか。「間違っているよ」と強く言えるだろうか。心が揺れるその瞬間に自分に心を寄せてくれる人がいたなら。彼の優しい人柄と合わないチグハグな人生はもしかしたら心ない言葉や周りが生みだした負の産物なのかもしれないと思った。

傷つく人、傷つける人をうみ出さないためには一人だけでなく皆が互いに認め合い、理解しあっていく事が重要だ。そして犯罪を犯してしまった人に対して、「犯罪者」として済ませるのではなくなぜそうなってしまったのか、なぜそうしなければならなかったのか心を寄せて向き合う事がとても大事だと思った。

人は弱い。一人では生きられない。生きるために善悪の領域を超えてしまうとしたらそれは社会からこぼれてしまいそうな弱い人達なのだ。社会から誰もこぼれない世界をつくることができたら犯罪者を「作る」こともないのではないだろうか。

人は「真っ白」で生まれてくるのだから。

小学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

人と人とのつながりを大切に

山口県下松市立久保小学校　六年　武智（たけち）　春香（はるか）

これは、夏休み祖母の家に行っていた時の出来事です。

「その後の体調はいかがですか。暑い時だから無理しないで下さいね。また困ったことがあれば、いつでも言って下さいね。」

祖母が電話を切ろうとしたその時、電話の相手のお年寄りが、その電話をなかなか切ることはなく、話しの続きの内容を、私は祖母の横にすわりずっと聞いていました。

そのお年寄りは、日にちと曜日が分からなくてゴミ出しができなくなり、重たいゴミはひざが悪いから出せなくなったから家の中にゴミがたくさんあることを、祖母にお話ししていました。それを聞いた祖母は、

「今から、すぐお家に行きますよ。心配しないで、大丈夫だから。後でゆっくりお話ししましょうね。」

と祖母は電話を切るとすぐにそのお年寄りの家にかけつけました。

私の祖母は地いきの民生委員をしています。一人暮らしのお年寄りの家に訪問して、どんなことに困っているのかを話しを聞いています。そして、

市役所や警察署などに連絡をして、どうしたらいいのかを聞いたり、いっしょに相談をしに行くこともあるそうです。

困っている時に、近くに相談にのってくれる人がいること、困っていることを解決できる人とのつなぎ役をする祖母。人と人がつながりを持って生活することができて、その中に、祖母のような相談相手になる人が身近にいることで、地いきのお年寄りは安心して生活を送れると思いました。

毎日のように、テレビや新聞で見る悲しいニュースがあります。例えば、インターネットを通して悪口を言いふらして他人を傷つけること、新型コロナウイルス感染者への差別、子どもやお年寄りへのぎゃくたい、いじめ、あおり運転、薬物乱用などの事件があります。

こんなにたくさんある悲しいニュースが、どうやったら減っていくことができるのかをこのお年寄りと、相談相手になっている祖母のことをヒントに考えました。

家族や学校の先生、そして友達や、地域の人と、それぞれにつながりを持ち、相談し合える社会になれたら、悲しニュースがなくなって「明るい社会」になると思いました。一人で考えず、相談することで、心が楽になったり、気づくことができたり、反対に相手の力になることもできると思います。

今の私に何か出来ることはないだろうか。

私の住んでいる久保地いきでは、小さい頃から地いきの人たちに大切に見守られているおかげで私たちは安心して成長していくことができています。

「おはようございます。」

「元気だね。今日も行ってらっしゃい。」

「今日は元気がないけどどうしたん。」

「暑いね。しっかり水分とるんよ。」

「寒いけど、かぜひかんことよ。」

朝、通学路の交通量の多い交差点では、毎日地いきの見守り隊の方が交通立しょうをしてくださ

います。

まるで、もう一つの家族のように。

あいさつの言葉に必ず一言そえて、私たちの体調を気づかった言葉や、おもしろいことを言っていっしょに笑ったり。時には私たちのことを思い注意してくださったり、はげましの言葉をかけてくださったりもします。

だから、私たちは、朝からとても明るい気持ちで学校へ登校することができます。

新型コロナウイルスが流行する前は、地域の行事や活動もたくさんありました。夏のさんさ踊りのお祭りや、そうめん流し、ウォークラリーや、公民館祭り。そして、どんど焼きや、お米作り。

地いきの方々と行事や活動を通して、ただ楽しんで喜ぶだけではなく、たくさんお話をして交流することで、地いきの方々に目に見えないところでいっぱい支えてもらっていることに気づき、心が温かく感じる事を実感しています。

このように、人と人とのつながりを大切にしている地いきは、きっと犯罪や事件がない「明るい地いき」になり、やがてこの輪が地いきから社会に広がり「明るい社会」になっていくと思います。

まだ、子どもの私たちができることは限られていると思うけれど、地いきとのつながりを大切にするために、気持ちのこもったあいさつをすることと、地いきの行事に積極的に参加して、子どもでも地いきの一員として、地いきの方々とのつながりを大切にしていきたいと思いました。

小学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

みんながつながる社会を目指して

香川県丸亀市立城西小学校　五年　宮脇（みやわき）　杏奈（あんな）

家でお母さんとニュースを見ていた時です。六才の女の子がジャングルジムから落ちて亡くなったというニュースがながれて、悲しい気持ちになりました。お兄ちゃんと公園で遊んでいて、ジャングルジムから落ちたといっていました。私もジャングルジムで遊ぶことがあるし、こわいなと思いました。

ニュースでは、何があったのか調べるといっていたので、気になって何日かニュースを見ていると、その後で、実は、お兄ちゃんの暴力で亡くなっていたということがわかりました。お兄ちゃんは十七才で、妹の世話がつらかったそうです。

「どうして…ひどい。」

私は六才の女の子がかわいそうで、それ以上何も言えなくなっていました。でも、お母さんは、

「二人ともかわいそうに。」

と言いました。私は、かわいそうなのは妹でお兄ちゃんはひどいというと、お母さんは、

「だれか周りに助けてくれる人や、たよれる人がいたら、こんな事にはなってなかったかもしれないじゃない？」

と答えました。

私にはわかりませんでした。なぜかというと、私には四つ上のお姉ちゃんがいて、時にはおたがいにイライラしてしまう事もあるけれど、たたいたりたたかれたりなんて、考えられないからです。

私は、家族だけではなくて、人をたたいたりけったりしたことはありません。でも、もし私が、このお兄ちゃんの立場だったらどうだろうと考えてみました。

私が十七才の高校生で、夏休みになって、宿題がたくさんあったり、友達と遊びたかったりしたら、どうだろう。今の私よりも、もっといろいろやりたいことがたくさんあるのに、毎日小さな妹の面どうをみて過ごしていたらどうだろうと思いました。イライラしておこったり、たたいたりしたくなるかもしれません。そう考えた時に、お母さんの言葉が少しわかったような気がしました。

私には、お父さんやお母さんがいて、いっしょに暮らしていなくても、おじいちゃんやおばあちゃんがいます。コロナでなかなか会えなくなっているけど、電話で話すと、色々なことを喜んでくれて、ほめてくれます。いつも私たちのことを大切に思ってくれているのがわかります。

そして、私の通う小学校では、地域の人が通学路を一緒に下校してくれたり、見守ってくれたりしています。あいさつをするとにこにこしてあいさつを返してくれます。見守ってくれているという事は、大切にしてくれているという事だと思います。

地域の人には、城西まつりというお祭りをひらいてもらったり、八朔だんご馬という伝統行事を見せてもらったりしています。私はこの町と、つながっているのだと感じています。

小学校での私は、自分からたくさん話しかけるのは苦手です。でも、学校では、担任の先生だけじゃなく、ほかの先生も声をかけてくれて話をします。校長先生には、登り棒の新しい遊び方を教えてもらったこともあります。友達はもちろんだ

けど、先生ともつながっているのだとわかりました。

あの兄妹には、だれもいなかったのかもしれません。

人は、だれかとつながっている事で、困っている時に相談したり、助け合ったりしていくことができるのだと気が付きました。そして、大切に思われていることで、人を大切に思うことができるのだと思いました。

犯罪や非行の無い明るい社会は、みんながつながりをもって、支え合うことでできていくのだと思います。

今の私には、社会を変える力なんてないけれど、あいさつをしたり、がんばって自分から話しかけたり、小さな事ならできます。そして、ひとりひとりの小さな力が、いつか、犯罪や非行のない明るい社会に変えていくのだと信じています。

中学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

心の色を感じて

北海道東神楽町立東神楽中学校　一年　村上（むらかみ）　友紀乃（ゆきの）

あの日の出来事を私は一生忘れることはないだろう。

それは一年前の暑い夏の日、家族と大好きだった曽祖母のお墓参りに行った時のことだった。私がお墓を掃除していると、ふと墓石がかけていることに気がついた。

「大変！墓石がかけているよ。」

私が母に伝えた時、一瞬母が悲しそうな目をしたのを覚えている。そして少しの沈黙の後、母は言った。

「まだおばあちゃんが生きていた頃にね、誰かにいたずらされて墓石を倒されたことがあって。その時、おばあちゃんがとても悲しんでいてね……。」

その母の話を聞いて私の心は一瞬にしてぐちゃぐちゃになった。それが怒りからくるものなのか悲しみによるものなのか自分でもわからなかった。ただ、生まれて初めて抱く感情だった。

「絶対許せない！」

と言った私の声は自分でも驚くほど震えていた。誰にでも優しかったおばあちゃん。いつも私が会いに行くと、とても喜んで私の頭をいっぱい

撫でてくれたおばあちゃん。そんなおばあちゃんがどれほど傷ついたか、それを考えると私の胸は張り裂けそうだった。母はそんな私に気づいたのか私の背中に手をあて

「友紀乃の心、素敵に光れ！」

と言った。その瞬間、私に懐かしい記憶がよみがえってきた。

まだ幼かった私と母との「心の色遊び」

「人は怒りや悲しみの中では心の色を無くしてしまうの。そして喜びや優しさの中では心はとてもきれいな色に輝くの。」

と母はよく話をしてくれた。幼かった私はいつも母に

「今ゆきのの心は何色？」

と聞いた。

「友紀乃の心、素敵に光れ！今はかわいいピンクに光っているよ。」

私はどんなに気分が沈んでいる時も母のその呪文を聞けば機嫌が良くなったのを覚えている。

そして今も……。不思議と母の呪文で私の乱れた心は静かになった。

母の話には続きがあった。

「でもね、おばあちゃんは、そのいたずらした人のことを一度も悪く言わなかったの。それどころか、その人が同じ過ちを繰り返していないか心配していたの。」

そう話す母は少し誇らしげだった。

人は色々な事情を抱えて生きている。きっとお墓を倒した人も何らかの事情で心の色を無くしてしまっていたのだろう。「今、その人も私のように心の色を取り戻していてほしい」私は、いつの間にかそんな気持ちになっていた。さっきまで許せないと思っていた気持ちはもう消えていた。曽祖母が悲しんでいたのは、もしかしたら墓石を倒されたことではなく、その人が心の色を失ってしまったことだったのかもしれないと思えたからだ。

今コロナ禍で多くの人たちが深い悲しみの中、

心の色を無くしている。ニュースなどでそんな人達の起こした犯罪が報道されているのを見ると、とてもつらい気持ちになる。一度罪を犯すとその罪は一生消すことはできないだろう。しかし、前に何かの本で読んだことがある。人は暗闇の中では生きていけないが、そこに一筋の光が差し込めばその光を希望に変えて生きていくことができると。まさにあの時、母との懐かしい思い出がその光となり、色を失った私の心に本来の色を取り戻してくれたのだと思う。

そう、心の色を取り戻すのにはその光が必要なのだ。罪を犯してしまった人の心にもその光が届き、自分の心の色を感じることができたら、その時初めて自分の過ちを心から悔い改め、正しい道を歩み始めることができるのではないだろうか。

そして、その光を届けることが出来るのは私たちの「優しさ」であるということ。信じる優しさ、励ます優しさ、許す優しさ、そのたくさんの優しさは時として相手だけでなく自分の傷ついた心も照らす光となる。あの時の出来事は私にとても大切なことを教えてくれた。

もしこの優しい光が今を生きる全ての人たちに届いたら、その一人一人の小さな光が集まり、大きな光となって私たちの生きる社会を明るく照らすことだろう。

一年経った今、私は母や曽祖母のような優しい光を誰かに届けられているだろうか。

これからはこのことを常に自分に問いながら生きていこうと思う。

そして、今だから事私は伝えたい

「信じてほしい心の光を

感じてほしい心の色を……」と。

中学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

もっと見て聞いて

愛媛県西条市立東予西中学校　三年　伊藤（いとう）　暖（ひなた）

皆さんは、誰かに「つらい」と言われた時、その人にどう声をかけますか。どのように接しますか。

中学一年生の時、私は学校に行くのがしんどくなりました。原因は人間関係です。周りの人が自分のことをどう思っているのか、私は、皆にどう思われているんだろう、嫌われているのだろうかと、考えすぎて辛くて怖くてたまりませんでした。そんな私に母は何がつらいかわからないので、

「とにかく学校に行きなさい。」

と言っていました。そう言われても、私も行きたいけれど怖くて、行けば何かを言われるかもしれない、という不安がつのるばかりで、とにかく怖くてつらくて耐えられませんでした。そんな時父が、

「ひなた、ゆっくりでいいんだよ。」

と声をかけてくれたのです。その時私は、こんなふうに学校に行けない自分でも、周りの人とうまくできない自分でも、父は受け入れてくれるんだと思いました。そう思うとだんだん前向きになることができ、学校にも行けるようになりました。おかげで今はクラスの学級委員長を務め、自

分から進んで発表するなど、人前に出る事が怖くなくなりました。

「誰かに受け入れてもらうことで、前向きになれる」これは誰にでも共通することなのではないかと思います。例えば私のように人間関係で悩んでいる人。何かうまくいかないことがあって後ろ向きになっている人。罪を犯してしまった人もそうです。調べてみると、再犯の理由はいろいろだけど、仕事がうまくいかず経済的にしんどくなったり、職場や地域で孤独だったり、ということも再犯の大きな理由だそうです。

そんな人たちの心はどうでしょうか。私はその人たちの心を考えると、とてもつらく思いました。「働きたいけど怖くて働けない」「またうまくいかないかもしれない」と、怖くて苦しくて、つらい気持ちでいっぱいなのではないでしょうか。過去に「罪を犯した」そんなことは自分が一番わかっています。中には「なぜこんなことをしたのだろう。」と後悔している人もいると思います。

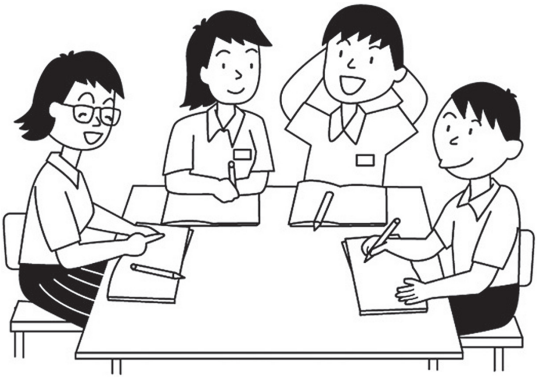
過去に前科があっても、今、がんばって、必死に働こうとしている人もいます。そんな人たちにとって、自分を受け入れてもらえることは、どんなにうれしいことでしょうか。私もできないことがある自分を、そのまま受け入れてもらえたことで、心が軽くなりました。罪を犯した人たちにとっても、過去の罪は過去の罪、今現在前向きにがんばろうとしていることを受け入れてもらえることで、もし何かうまくいかないことがあっても、もう少しがんばろう、という勇気を持てるのではないでしょうか。誰にとっても「そのままの自分でいいんだよ」と言ってもらえることは、とても大きな心の支えになると思います。

誰もがありのままの自分を出せる社会。ありのままのその人を受け入れる社会。それが「明るい社会」につながるのではないでしょうか。一人一人の、受け入れるという気持ちが、誰かの心を明るくすると思います。過去に過ちを犯したから、という理由で受け入れてもらえないと、人間は決

して失敗してはならないことになってしまいます。誰だって失敗してしまうことはあります。けれど、今、がんばろうとしている人もいるのです。その人たちを受け入れ、「一緒にがんばろう」という声を、私はかけたいです。

そんな一言をかけられる人になるために、今私にできることは、もっと周りを見て、周りの人の声を聞くことだと思います。自分の周りにつらく思っている人はいないか、自分に自信が持てずに苦しく思っている人はいないか、そんなことに気づき、その人たちの声を聞ける人になりたいです。そして父が私にしてくれたように、「大丈夫だよ。ゆっくりでいいよ。一緒にがんばろう。」と声をかけられるようになりたいです。

その一言が、その相手の話を聞く行動が、きっと私たちの社会を明るくします。そんな一言が当たり前の社会は、きっとどんな人にもあたたかい、やさしい社会だと思います。ぜひ一緒にそんな社会を作っていきましょう。



中学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

目が持つ力

福岡県北九州市立南曽根中学校　三年　藤木（ふじき）　太基（たいき）

―犯罪―この言葉には恐怖をおぼえる。だが、あまり危機感はない。なぜなら、僕は今まで犯罪に巻き込まれたことがないからだ。世の中には、犯罪をするような人は少なく、だから巻き込まれることも滅多にないと思っている。犯罪に対してあまり実感の湧かない僕は、母に「今まで身近に起きた犯罪ってあるかな？」と聞いてみた。すると、「ウチは被害に遭わなかったけど、ゴールデンウィークに起きた放火事件じゃない？」という答えが返ってきた。

今年の五月、僕の住んでいる地域で、夜中に車が放火される事件が数件立て続けに起きた。テレビのニュース映像で見る現場が、あまりに近所で驚いた。高級車ばかりを狙っているという報道だったので、父と母は「ウチは大丈夫だね。」と言いながらも、まだ犯人は捕まっていなかったので心配そうだった。次の日も夜中に放火事件が起きたが、それと同時に犯人が捕まったと報道されていて、ひとまず安心した。犯人は隣町に住む若い青年だった。犯人の動機は報道されていなかったが、高級車ばかりを狙っていたので、何かお金持ちの人に対する羨ましさや妬みがあったのかもし

れないと思った。

僕は、どんな理由でも人の車に放火する気持ちは分からない。だけれど、「分からない」と言ってしまうだけでは何も解決しないし、「分からない」から放置してよい問題でもない。だから、自分なりにどうすればよいのかを考えてみた。

例えば、犯人が抱えていた悩みやストレスを発散できる環境があれば、あるいは話せる家族や友達がいればどうだっただろう。少しでも気持ちが明るくなっていれば、人の車に放火するなんてことは考えなかったかもしれない。

また、犯罪を実行できない環境作りも必要だと思った。その一つとして「人の目」があると思う。毎日夜中に警察官がパトカーで見回りするのは難しいと思うけど、地域の人たちで週に一回ぐらい見回りをするだけでも抑止力になると思う。誰かに見られている可能性があるというだけで、少しは犯罪をするのを留まるはずだ。さらに住民からしても、夜に見回りをしてくれる人がいることは安心できる。「人の目」があると、犯人にとっては抑止力となり、地域住民にとっては安心感につながると思う。

そして、まだ学生である僕にできることは何かを考えてみた。

まず「友達を気にかける目」を持つことだと思う。僕たち学生は、犯罪というより友達にいたずらや意地悪をする方が身近な出来事だと思う。それを「まだ子どもだから。友達同士のことだから。」と許していては、癖や染みついた思考のせいで、大人になった時に本当の犯罪を起こしてしまうと思う。それを防ぐためには、「友達を気にかける目」を持って、悪い行動をしている友達には声をかけ、何か理由がありそうなときは話を聞いてみる。そうして相手の気持ちに寄り添えば、悩みやストレスを抱え込む人は少なくなると思う。

そして、「自分の目」も重要だと思う。自分自身は正しい行動をとれているか、悩みやストレスを抱えこんでいないかなど、自問自答することも

必要だと思う。他人を気遣うことも大事だが、その代わりに自分を蔑ろにしてしまっては意味がない。みんながそれぞれ「自分の目」を持つことで、悪いことをしようという気持ちを防ぐことができると思う。なぜなら、自分のことを一番分かっているのも、自分が悪いことをするときに、必ずそれを見ているのも自分自身だからだ。

気持ちを察して寄り添ってくれる「家族や友達の目」防犯の意識を持って見回ってくださる「警察官や地域の人の目」友達の悩みに気づいてあげられる「友達を気にかける目」正しい行動ができているかを確認する「自分の目」など、色々な人たちの目の力で、犯罪を減らすことができれば、より明るい社会が作られると思う。

小学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

より良い今を重ねて

広島県福山市立神辺小学校　五年　松山（まつやま）　葉月（はづき）

私の住んでいる町は、歴史のある落ちついた所です。くらしの中での「犯罪」は、ニュースや新聞で目にするだけで、身近に感じる事はありません。

「社会を明るくする運動」と聞いた時に、父の知り合いのKさんを思い出しました。以前、保護司をしていると聞いたことがあるからです。そこでKさんに、話を聞きに行くことにしました。

Kさんは、やさしい笑顔をしている人です。まず、保護司について教えてくれました。保護司の仕事とは、犯罪を犯して刑罰を受けた人の生活を月二回観察する事、更生を期待して社会に帰るサポートをすること、だそうです。Kさんは、保護司を十八年も続けているそうです。それを聞いて私は、犯罪を犯した人と会って話すなんて怖くないのかな、私だったら怖くて仕方ないのにな、と心配になりました。

それを一八年も続けてこられていることがすごいなと思いました。

そこで、私は「犯罪を犯した人をどう思いますか。」と聞きました。

Kさんは、「犯罪を犯した人も自分も同じだと思っている。自分にもどんな人でも負の部分はあ

る。境遇や事情により出してしまっただけだ。」と答えてくれました。私は、そんな風に考えた事が無かったのでおどろきました。また、続けてこのように教えてくれました。「悪い事をして後悔をしない人はいない。みんな反省している。」「やったことは消えないけれど、取り返しはつくと私は思っている。」

「どうするかというと、善行を積む事。たくさん善行を積めば、悪業の割合は少なくなる。時間をかけてつぐなうしかないんだ。」

私は、その言葉を聞いて犯罪を犯した人に対するイメージが変わりました。

私も、やってしまった後でやらなければよかったと思うことがあるからです。そして、注意されて直そうと思っても、なかなか直せないこともあります。

そういう時は、思うようにいかず自分の事が嫌になってしまったり、イライラしてしまいます。Kさんの所に来る人もそんな気持ちなのかな、と思いました。こういう時に、「取り返しはつく。」とはっきりと言ってもらえたら、どんなに勇気がもらえて、心強いでしょうか。

大切なのは、むやみに怖がることなく、助けてあげたり、見守ったりしながら、より良い今を重ねていくことだと気づきました。

私はKさんの話で、犯罪はこわい人がする物だと思っていたけれど、どんな人にでも起こり得る事なのかも知れないと思いました。

そして、最後にKさんは、人と接する時に大事なことを教えてくれました。それは、「どんな相手でもバカにしない、見下さない。」ということです。そうすれば、自分も、相手も大切にできるそうです。

Kさんとの話が終わっても、ずっと心は温かい気持ちでいっぱいでした。

私は、Kさんの様な大きな事は、まだできないけれど、まずは、普段の生活の中でKさんから教えてもらった人との接し方を実践していきたいと思います。そして、私もより良い今を積み重ねていきたいです。

小学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

非行を防ぐために何ができるか

徳島県美馬市立美馬小学校　六年　原田（はらだ）　紘太朗（こうたろう）

ぼくの母は、今年から子ども食堂を始めました。月に三回、高校生以下の子どもに昼食を無料で提供するという活動です。また、子ども食堂の前後の時間は、遊んだり勉強したりする子ども教室も開いています。夏には、三才から十八歳までのオリエンテーションのイベントがあり、ぼくも参加して楽しみました。

ぼくは、母になぜこのような活動を始めたのかを聞いてみました。母は、これまで中学校の教師として働く中で、間違った行いをしてしまう生徒達と出会ってきたこと、その原因の多くは心に不安や悲しさ、さみしさ、腹立たしさを発散する方法や場所がなかったからということ、そして母はその生徒達にもっと何かできなかったかとずっと考えていたこと、などを話してくれました。

ぼくは、人が非行にはしるのは、非行をしてしまう人自身に問題があると思っていました。でも、母の話を聞いて、そうではないのかもしれないと考え直しました。家庭内で暴力をふるわれている子がいるとします。その子は、怖かったり親のことを思ったりして学校の先生や友達に話すことができないかもしれません。そうすると、その子は

それをたった一人でかかえこんでしまいます。その結果心に傷をおって人生に嫌気がさし、非行にはしってしまうかもしれません。家庭内だけではありません。友達にいじめられたから、友達に命令されたから、という理由で非行にはしる人もいるかもしれません。もし、ぼくも家で毎日嫌なことがあったら、深夜まで外出していると思います。

ぼくたちは、お互いの非行を防ぐために何ができるのでしょうか。

ぼくの学校の児童会目標は、「笑顔で助け合い一生けん命頑張ろう！」です。やはり、非行を防ぐのにも「笑顔」や「助け合い」が大切だと思います。母の活動を見ていて、学校でも、社会でも同じだと気付きました。母の団体のスタッフもみんな笑顔で子どもに接しています。ぼくも、嫌なことがあってもまわりの笑顔で救われたことがあります。仲間と助け合えるからできることもたくさんあります。何もなくて誰もいなくて、一人で一生けん命がんばるのは無理なので、しんどい時はまわりに相談したり、たよることも必要だなと感じます。

母の団体「つなぐ」は、まだ規模は小さいですが、美馬市や美馬市周辺の会社や個人の皆さんに活動や資金の援助をしてもらっていて、その輪が少しずつ広がっています。子ども達を地域全体で見守り、子どもも大人もこの活動を楽しみ、みんなの居場所をつくることが目標だそうです。高校生からボランティアのメンバーとして活動に参加できるので、ぼくも高校生になったら小さい子ども達のために活動したいと思います。

今、ぼくができることは、仲間の心に寄りそい、はげまし合ったり時には厳しく注意し合ったりしていくことだと改めて思いました。

小学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

あいさつだけはしっかりと

鹿児島県南九州市立中福良小学校　六年　山村（やまむら）　悠斗（ゆうと）

「ぐれてもいいから、あいさつだけはしっかりとしろ。」

これは、社会を明るくする運動の出前授業をしてくれた松村さんの言葉だ。

中福良小では、今年から、保護司の松村さんに来ていただいて、社会を明るくする運動について話をしてもらうことになった。

まず、鉄けんという人が作ったパラパラまん画の動画を見た。動画の中の男の子は、悪いことをした。そして、悪いなかまといっしょになって、どんどんぐれていった。けいさつにつかまり、さらに、悪いことをして。

でも、保護司の人が助けてくれて、立派な大人にしようとしてくれた。やさしい人だなと思った。それでも仕事でしかられるとまたおこって、ぐれて。それでも助けてくれた。そうしているうちに、悪い人から生まれ変わったかのように、やさしい人になっていた。

今まで、ぼくたちは、社会を明るくする運動や保護司という仕事について、全く知らなかった。最初は「保護司って何。」と思っていたけど、数本の動画を見たら、保護司の役わりを理解することができた。

松村さんは、初めて対しょう者に会う前は、今

でもきんちょうするそうだ。どんな人なのか分からないのだから、当たり前だ。でも、会った時には、全員に必ず言うことがある。それは、ぐれてもいいからあいさつだけはしっかりとしろということだ。それを聞いた時は、意味が分からなかった。しかし、

「中福良小には、あいさつ運動がある。あれは、いい。あいさつは、なかまを信じるということ。社会が明るくなる。」

と言われた時に、意味が分かった気がした。そして、今までのあいさつを考えてみた。

ぼくたちは、毎週水曜日にあいさつ運動をしている。でも、それは、ぼくたちが考えて自分からしたのではなく、中福良小でずっとしているからしているだけだった。

だから、今思うと、ぼくたちはあまり熱心にあいさつ運動をしていなかった。暑くてしなかったり、寒くてしなかったり。また、あいさつのために立っているのに、友達とテレビのことについてしゃべっていて、あいさつをてきとうにしたこともあった。

そんなとき、校長先生に注意されたり、地域の人におこられたりした。地域の人には、

「あいさつの時はぼうしをかぶれ。」

と大きな声でおこられた。ぼくたちは、

「何あの人。まじ最悪。あいさつ運動でぼうしをかぶらないといけないということは中福良小では決まっていない。なんでおこられないといけないんだ。」

と、みんなでぐちを言った。でも、松村さんの話を聞いて、これではいけないと思った。みんなも同じ気持ちだったと思う。

次の週の水曜日になった。ぼくたちは、まず、しゃべることを減らした。そして、深々と、心のこもったあいさつをしようと心がけた。友達が、

「だれが一番大きな声を出せるか、きょうそうしよう。」

と言った。そうして、ぼくたちは、見違えるようなあいさつをすることができてきた。

そんなとき、ピンクの車が近づいてきた。そして、信号で止まった。ぼくたちは元気よくあいさつをした。すると、窓が開きだして運転していた

男の人が、
「お早うございます。」
と、にこにこわらいながら、手をふってくれた。その他にも、いろいろな人が、ぼくたちに手をふってくれた。みんなで
「元気でるわ。朝からにらまれても、気持ちが悪いもんね。」
「あの人いい人だね。よし、がんばろう。」
と口々に言った。
同じあいさつなのに、社会を明るくする運動の出前授業を受けただけで、だらだらしてだめだったぼくたちが、しっかりとあいさつができるようになった。それは、すごいことだと思う。保護司の人たちの仕事は、すごいなと思った。ぼくたちをやる気にさせてくれて、しっかりとあいさつができるようになった。そして、あいさつを受けた人たちが、どんどん笑顔になっていく。松村さんが、社会を明るくする運動といっても、最初から大きなことをする必要はない。身近なことから始めればいいと言われた。ぼくたちにとっては、いいかげんな気持ちでしていたあいさつを、大きな声でせいいっぱい、心をこめてするということがそれにあたるんだなと実感したしゅんかんだった。
最後に、もう一度動画を見た。白黒なのに、なぜかカラーの部分があった。それは、黄色い羽根だ。男の子が生まれた時と、男の子がまじめに生きることができるようになった時に、黄色い羽根がでてきた。黄色い羽根のことをしっかりと知ってほしいからだろう。
調べてみると、この羽根は、社会を明るくする運動のシンボルだということがわかった。総理も黄色い羽根をつけているから、すごいなと思った。犯罪のない明るい社会にしようとしているところがすごいと思った。
ぼくは、保護司のようにはなれないかもしれない。でも、自分にできることをやりたい。松村さんのように人のためにがんばりたい。そして、ぼくもパラパラまん画の男の子のように、くいのない生き方をしたいと強く願う。

中学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

本当にカッコイイ大人に

青森県むつ市立田名部中学校　三年　髙橋（たかはし）　毅颯（きりゅう）

「おらぁ、どけよ。」

胸を張り、肩で風を切って歩いていた、あの頃の自分。夜な夜な家を飛び出し、仲間と集まっては大声で騒ぎ、明け方、話し疲れたら帰って眠る。その他、およそ小学生がやるような非行行為は大抵やった。

そして、児童自立支援施設に入った。小学校六年生の冬だった。

朝六時三十分起床。そんなの僕には無理だった。授業も四十五分間黙って座っていることすらできない。それが僕のスタートライン。

入所五日目、夕食のシチューの肉が少なかったことで大声を出し、暴れた。先輩たちの中で目立ちたいという気持ちもあった。しかし、あっさりと反省室に入れられ、五日間、周囲と隔離された。反省室では誰とも会えず、何もすることができない。唯一できるのは考えることだけ。だからずっと考えていた。なぜ自分がこんなことをしたか。どうすれば良かったのか。一定期間が過ぎると、施設の先生が話を聞いてくれる。その時に考えたことをしっかり話せれば、反省室から出られる。反省を話せなければ、期間が延長される。

小学生の時は、「こんな家にはいたくない」と思っていたが、施設に入ってから時々帰省すると、「このままこの家にいたい」と思うようになる。気づいていないだけで、僕はきっと恵まれた環境にいたのだ。

当時の僕は、自分を実物以上に強く見せ、目立ちたかったのだと思う。それはちょうど自然界で有毒生物がカラフルな色をしているのに似ている。自分が毒を持っているとアピールすると、確かに敵には襲われないが、味方になるかもしれない人まで遠ざけてしまう。僕はそんな生き方をしていた。

今考えれば、このようになる前に立ち止まるチャンスはいっぱいあった。小学生の時、悪いことをすると児童相談所の方が話を聞き、アドバイスもしてくれた。でも、当時の僕はそれを無視してしまった。「次に何かやったら児童自立支援施設に入ることになる」と言われても「どうせ大丈夫だろう」と悪いことを繰り返した。それを今はとても後悔している。

僕は、児童自立支援施設に入る程悪さをしたことは後悔しているが、そこで過ごした日々自体は全く後悔していない。なぜなら、僕はそこで大きく変わることができたからだ。

きっかけの一つは中学一年時の小中合同文化祭だ。文化祭の練習が長引き、皆がやる気をなくし始めた。僕は大きな声で文句を言った。僕としては、皆の気持ちを代弁して練習を早く終わらせるためだった。でも、ぼそっと「ダサイ」と言われた。それは小学五年生の後輩の言葉だった。僕は、反抗することをカッコイイと思っていた。でも、僕の場合、本当は弱い自分を隠すためにやっていた。それを見透かされたような気がしたのだ。

もう一つは野球部の部長になったことだ。施設の先生は、「お前はいつも怒られる立場だから、一度怒る立場になった方が良い。そうすれば、怒る側の気持ちも分かるから」と言った。部長になってみると、皆が好き勝手にやって、こっちの言

う通りにしないことにムカついた。でも、それはそれまでの自分の姿だった。僕は、どうしたら皆が言うことを聞いてくれるかを考えた。その結果、「まずは自分ができてから言おう」と思った。僕が言葉だけで部員に指示を出している時、誰も僕の話を聞かなかった。でも、努力して実際にやってみせてから言うと、言うことを聞いてくれた。僕はそれが嬉しかった。言うことを聞いてくれたことではなく、僕の努力を皆が認めてくれたような気がしたからだ。それから気づいたことがあって、皆が天才には憧れるのに努力家には憧れないのは、自分が努力したくないからだと思った。でも、自分が努力して認められる経験をすると、努力家の方がカッコイイと思えるようになっていた。

中学二年生の夏、僕は今の中学校に転入した。普通の中学校で一年が過ぎようとしている。時々怒られることはあるが、小学校時代のような悪いことはせずに生活している。僕は応援団に入ったのだが、体育祭の時、団長の代わりに全校にエールを送った。全力で大声を出した。全校生徒六百五十人が指示通り動いてくれた。正しい場所で正しい行動をすると、人は人を認めてくれる。自分を偽って強がる必要なんて、どこにもなかったのだ。

僕には夢がある。将来児童自立支援施設の先生になることだ。僕が施設で一番嬉しかったのは、僕が叫んだり口答えをしたりしても、二時間でも三時間でも話を聞いてくれたことだ。それまでは、僕がキレると向こうも怒鳴るだけだった。僕は、僕がしてきた経験を、同じようなことで悩んでいる子供達に伝えていきたい。そして、少しでも非行から立ち直る子供を増やしたいと思っている。

中学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

話を聞いてもらった経験から

宮城県仙台市立第一中学校　二年　小山（こやま）　礼（れい）

私は、毎日楽しく学校に通っている。授業も部活も楽しく活動し信頼できる友達や先生もいて、充実した生活が送られていると感じる。でも、小学校の時、一度だけ学校に行くのが苦しくてつらくて泣いてばかりいた時期があった。今思い返しても、その当時の、胸がつぶれるような、不安で仕方なかった気持ちがまざまざとよみがえり、思い出すのを止めたくなるほどだ。

不安の原因は、とても些細なことだった。当時の私は、食が細く、学校の給食を全部食べ切ることが難しかった。全部食べ切れなくても、担任の先生から叱られたり周りの友達から非難されたりすることは一度もなかった。それでも、私はつらくて不安でたまらなかった。その時のクラスでは、私以外の全員が毎日給食を完食していて、私だけが下膳の時、残したおかずを食缶に戻すことがあった。戻す時、誰も何も言わなかったけれど、私一人だけが何かものすごく悪いことをしているようで後ろめたい気持ちになった。今日も残すかもしれないというプレッシャーにさらされ、その状況に耐えられず、私は学校に行けなくなる一歩手前まで追いつめられていた。叱られたり非難され

たりすることがなかったこともありこのつらい気持ちを誰かに打ち明けることはなかった。学校では、給食を残す時も表面上は平気を装い、家でも「今度のクラス、給食みんな食べるんだよ。」とつらさを隠して明るく振る舞っていたように思う。

はじめは、給食の時間だけが苦しかったが、少しずつ他の時間も苦しくなってきた。給食の前の時間から落ち着かなくなり、やがて朝のうちから苦しくなり、しばらくすると前の晩から、そしてどの時間帯も給食のことをいつも考えてしまうようになってしまった。家の台所に貼ってある給食の献立表をしょっちゅうチェックして、ため息ばかりついていた。今思うと、給食のことぐらいで苦しいとかつらいとか学校に行きたくないとか、そこまで思いつめるなんて心配しすぎだと冷静に振り返ることができるが、その時は本当に深刻に考え、罪悪感と孤独感でいっぱいだった。

私は、両親に泣いてつらさを吐露するようになった。両親は話を聞いてくれて、いち早く私のつらさの深刻さに気付いてくれた。ある日、私は夕飯時に次の日がたまらなく不安になり涙が止まらなくなった。その時は家族全員が夕飯を中断して私のために方策を話し合ってくれた。母は「不安な気持ちをいろいろな人に知ってもらうのが一番いいと思うよ。」と言って、「まだ先生が学校にいらっしゃるかもしれないから一緒に話をしに行こう。」と私を学校に連れて行ってくれた。幸い、担任の先生がまだ学校にいて私や母の話を静かに聞いてくださり少し安心したのを覚えている。一気につらさが解消することはなかったけれど、家族や先生に話を聞いてもらえたことで目の前が明るくなるような感覚があった。父や兄も「そんなことで悩むなんて」「それのどこがつらいんだ」などと言わずに、私のつらさを軽減するにはどうしたら良いかを一緒に考えてくれた。頼りになる人が身近に何人もいてありがたいと思った。

小学生の頃に給食のことであんなに悩んで涙を流していた私が、今ではそんなことがあったのが

嘘のように、毎日給食を完食している。私は、あの経験があったから、いざ困った時やつらい時周囲の人々に相談したり気持ちを打ち明けたりすることの大切さを学ぶことができた。今は大きな悩み事や心配事はないけれど、いざとなったら友達や家族や先生がきっと話を聞いてくれて力になってくれると確信している。

世の中には環境に恵まれず過ちを犯してしまったり、ちょっとした行き違いで道を外れてしまったりする人がいる。どこかのタイミングで、誰かがその人が抱えるつらさや苦しさを聞いて、一緒に考えて共に動いてくれていたら結果は違っていたのかもしれないと思う。私の場合、話を聞いてもらったのは家族や先生だったが、周囲に話を聞いてくれる人は必ずいる。地域の人やいろいろな相談機関、そして今は悩み相談ダイヤルなどの窓口もとても充実している。どこかで、誰かに話を聞いてもらって心を守ることができる社会にしたいと思う。私も、誰かの悩みを聞くことで負担が少しでも軽くなるなら、その人のために力を尽くしたい。いつか、私も誰かに助けを求められた時は、当時の家族や先生の対応を思い出し、寄り添ってあげることを心がけたい。思い出すのもつらい小学校の頃の経験だが、私はこの経験をあえて絶対に忘れず、苦しんでいる人やつらい思いをしている人に力添えできる社会の一員でありたいと思う。

中学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

地域の輪を　つながりを

沖縄県与那原町立与那原中学校　二年　儀間（ぎま）　そよ葉（は）

「昨日さ、夜に先輩たちとお酒飲んで、バレんようにに学校に忍び込んだってば～」

これが、中学一年生のときの前の席の女子が一年ぶりに私と話した最初のこと。

彼女は最初の方は登校していたが、だんだんと遅刻・欠席が増えていき、学年末の方は姿を見せなくなった。定期テストも受けないし、授業中も居眠り。提出物なんて出すはずもなく、自慢げに皆に見せていた一学期の成績表には「1」が並んでいた。身なり検査では必ずひっかかり、たばこを持っているのをみつかったり、先生への口応えで呼び出されることもしょっちゅうだった。私は少しずつ、彼女は非行に手を染めて、感覚が麻痺してきていることを理解していった。しかし、彼女の性格はいいままで、楽しくしゃべっていると き思い出すのは小学生の頃のことだった。

彼女と私は、小学五年生のとき、クラスメイトだった。ある日の放課後に、二人で教室に遅くまで残り、その週中に仕上げなければいけない読書感想画に取り組んでいた。彼女は、頭が良く、社交的で誰とでも楽しく話し先生からも好かれていた。なので、中学生になってあの話を聞いたとき受けたショックは大きく、彼女は別人になってしまったのかとさえ思った。

そもそも、なぜ「非行」をするのか。彼女も、自分がしていることは正しくないということは知っているのに。私は彼女の話を聞いていて知ったことがいくつかある。

一つ目は、非行をするときはほぼ必ず仲間がいて、そこには「先輩」という存在があることだ。もう成人した非行仲間の先輩がときどき顔をみせてはお酒やたばこをお土産にしていたり、深夜はいかいしているときに巡査にみつかりそうになったら先輩として仲間をかくまったりするそうだ。そしてなにより、その存在があると安心するのだろう。「学校に行かなくても大丈夫」「未成年だけど飲酒、喫煙したってバレない」と思ってしまう。

二つ目は、夜中になると、未成年でもお酒やたばこを買える店が結構あるということだ。お金を払えば、未成年の飲酒喫煙を止めない大人がいる。手軽にお酒やたばこを買えるので、自分でもいつのまにか止められなくなっているのだ。

このことから、私は、きっかけさえあれば誰でもすぐに非行に手を染められると考えた。なにしろ、環境がきれいに整っているのだ。仲間との楽しい遊び、気軽な娯楽がエスカレートしているだけのこと。そして、正しい道にもどしてくれる大人と出会えないでいるだけのこと。だから、これは地域に延々と続く、負の連鎖なのだ。この連鎖を断ち切るには、地域ぐるみで、全員の問題として捉えていかなければならないと感じる。

私は、非行のない地域社会づくりに必要なのは二つだけだと思う。一つは、非行をする子どもたちを見捨てず、導いてくれる大人たちの存在。もう一つは、私達の、友達がしているからといって流されず、はっきり断る力。しかし、実際はとても難しい。そこで大切なのが、地域の力だと思っている。大人に自分の存在に気づいてほしくてわざと非行をする人もいる。「地域の子どもは地域で育てる。」今以上に地域の結びつきを深め、子どもと真剣に向き合い声をかけてくれる、そんな大人がいる地域になれば、非行だって犯罪だって減ると思っている。

もし彼女が非行から足を洗い、学校に来れたら、もしくはどこかで会えたら。そのときは、また、彼女のおもしろい話をいっぱい聞きたい。

更生保護法人　立川更生保護財団について

立川更生保護財団は、犯罪や非行をした人たちの改善更生を図るため活動されている民間ボランティアの方々が、困難な状況の中で、地道に更生保護活動に取り組む姿に深く感銘を受けた立川ブラインド工業株式会社創業者立川孟美氏が昭和63年10月に設立し、以来，更生保護事業を一層推進してきました。

財団としては、犯罪のない明るい社会の実現のため、次のような事業を行っています。

一　〝社会を明るくする運動〟～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～への協力

本運動では犯罪や非行のない地域社会の実現のため、全国各地で様々な取組が行われています。財団としても、本作文コンテスト作文集の制作をはじめ、様々な取組に協力をしています。

二　保護司活動への協力

犯罪や非行をした人の立ち直りを地域で支えている民間ボランティアである保護司は地域社会で保護観察や〝社会を明るくする運動〟をはじめとした犯罪予防活動などに取り組んでいます。財団としては、保護司の行う地域活動や学校との連携活動に対して支援を行っています。

財団としては、今後も犯罪や非行をした人の立ち直りを支援している方々への協力・応援を通じて、犯罪のない明るい社会の実現に向けて、積極的に事業を展開していきます。

第72回“社会を明るくする運動”
～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～
作文コンテストのお知らせ

第72回“社会を明るくする運動”作文コンテストは次のとおり、実施いたします。多くの学校でこの作文コンテストに取り組み、たくさんの応募をしていただきますよう、御協力お願いします。

なお、作文コンテストの詳細については、次ページの最寄りの保護観察所（各都府県の県庁所在地と、北海道では札幌、函館、旭川、釧路）にお問い合わせください。

○主催

法務省
“社会を明るくする運動”中央推進委員会

○後援（予定）

全国連合小学校長会／全日本中学校長会／全国小学校国語教育研究会／
全日本中学校国語教育研究協議会／公益社団法人日本ＰＴＡ全国協議会／
更生保護法人全国保護司連盟／日本更生保護女性連盟／
特定非営利活動法人日本ＢＢＳ連盟／更生保護法人日本更生保護協会

○応募規定

（１）資格

全国の小学生及び中学生

（２）テーマ

“社会を明るくする運動”の趣旨を踏まえ、日常の家庭生活、学校生活の中で体験したことを基に、**犯罪・非行のない地域社会づくりや犯罪・非行をした人の立ち直りについて**考えたこと、感じたことなどを題材としたものとします。

（３）原稿の枚数

400字詰め原稿用紙３～５枚程度

（４）応募先及び応募締切日

応募先：“社会を明るくする運動”都道府県推進委員会（事務局：保護観察所）
締切り：本年９月頃（締切日は各都道府県推進委員会によって異なります。
詳しくは、最寄りの保護観察所へお問い合わせください。）

（５）その他

応募作品は、他の作文コンテスト等への応募作品又は応募予定作品を除く自作・未発表のものに限り、原則として原本（手書きのもの）とします。応募に当たっては、題名、学校名、学年、氏名を明記してください。

○選考

“社会を明るくする運動”各地区推進委員会及び同各都道府県推進委員会によって選考し、同中央推進委員会に推薦された作品から、中央推進委員会において審査し、入賞作品を決定します。

○表彰（予定）

- 最優秀賞：法務大臣賞……小学生・中学生各１点
- 優 秀 賞：全国連合小学校長会会長賞……小学生３点
  全日本中学校長会会長賞……中学生３点
  全国保護司連盟理事長賞……小学生・中学生各３点
  日本更生保護女性連盟会長賞……小学生・中学生各３点
  日本ＢＢＳ連盟会長賞……小学生・中学生各３点
  日本更生保護協会理事長賞……小学生・中学生各３点

お問い合わせ先 “社会を明るくする運動”都道府県推進委員会事務局

推進委員会	事務局(保護観察所)	郵便番号	住　所	電話番号
札幌地区	札幌保護観察所	060-0042	北海道札幌市中央区大通西12丁目	011-261-9225
道南地方	函館保護観察所	040-8550	北海道函館市新川町25-18	0138-26-0431
旭川地区	旭川保護観察所	070-0901	北海道旭川市花咲町４丁目	0166-51-9376
道東地区	釧路保護観察所	085-8535	北海道釧路市幸町10-3	0154-23-3200
青森県	青森保護観察所	030-0861	青森県青森市長島1-3-25	017-776-6419
岩手県	盛岡保護観察所	020-0023	岩手県盛岡市内丸8-20	019-624-3395
宮城県	仙台保護観察所	980-0812	宮城県仙台市青葉区片平1-3-1	022-221-1451
秋田県	秋田保護観察所	010-0951	秋田県秋田市山王7-1-2	018-862-3903
山形県	山形保護観察所	990-0046	山形県山形市大手町1-32	023-631-2277
福島県	福島保護観察所	960-8017	福島県福島市狐塚17	024-534-2246
茨城県	水戸保護観察所	310-0061	茨城県水戸市北見町1-1	029-221-3942
栃木県	宇都宮保護観察所	320-0036	栃木県宇都宮市小幡2-1-11	028-621-2391
群馬県	前橋保護観察所	371-0026	群馬県前橋市大手町3-2-1	027-237-5010
埼玉県	さいたま保護観察所	330-0063	埼玉県さいたま市浦和区高砂3-16-58	048-861-8287
千葉県	千葉保護観察所	260-8553	千葉県千葉市中央区春日2-14-10	043-204-7795
東京都	東京保護観察所	100-0013	東京都千代田区霞が関1-1-1	03-3597-0120
神奈川県	横浜保護観察所	231-0003	神奈川県横浜市中区北仲通5-57	045-201-3006
新潟県	新潟保護観察所	951-8104	新潟県新潟市中央区西大畑町5191	025-222-1531
山梨県	甲府保護観察所	400-0032	山梨県甲府市中央1-11-8	055-235-7144
長野県	長野保護観察所	380-0846	長野県長野市旭町1108	026-234-1993
静岡県	静岡保護観察所	420-0853	静岡県静岡市葵区追手町9-45	054-253-0191
富山県	富山保護観察所	939-8202	富山県富山市西田地方町2-9-16	076-421-5620
石川県	金沢保護観察所	920-0024	石川県金沢市西念3-4-1	076-261-0058
福井県	福井保護観察所	910-0019	福井県福井市春山1-1-54	0776-22-2858
岐阜県	岐阜保護観察所	500-8812	岐阜県岐阜市美江寺町2-7-2	058-265-2651
愛知県	名古屋保護観察所	460-8524	愛知県名古屋市中区三の丸4-3-1	052-951-2949
三重県	津保護観察所	514-0032	三重県津市中央3-12	059-227-6671
滋賀県	大津保護観察所	520-0044	滋賀県大津市京町3-1-1	077-524-6683
京都府	京都保護観察所	602-0032	京都府京都市上京区烏丸通今出川上る岡松町255	075-441-5141
大阪府	大阪保護観察所	540-0008	大阪府大阪市中央区大手前4-1-76	06-6949-6240
兵庫県	神戸保護観察所	650-0016	兵庫県神戸市中央区橘通1-4-1	078-351-4005
奈良県	奈良保護観察所	630-8213	奈良県奈良市登大路町1-1	0742-23-4869
和歌山県	和歌山保護観察所	640-8143	和歌山県和歌山市二番丁３	073-436-2501
鳥取県	鳥取保護観察所	680-0842	鳥取県鳥取市吉方109	0857-22-3518
島根県	松江保護観察所	690-0841	島根県松江市向島町134-10	0852-21-3767
岡山県	岡山保護観察所	700-0807	岡山県岡山市北区南方1-8-1	086-224-5661
広島県	広島保護観察所	730-0012	広島県広島市中区上八丁堀2-31	082-221-4495
山口県	山口保護観察所	753-0088	山口県山口市中河原町6-16	083-922-1327
徳島県	徳島保護観察所	770-0851	徳島県徳島市徳島町城内6-6	088-622-4359
香川県	高松保護観察所	760-0033	香川県高松市丸の内1-1	087-822-5445
愛媛県	松山保護観察所	790-0001	愛媛県松山市一番町4-4-1	089-941-9983
高知県	高知保護観察所	780-0850	高知県高知市丸ノ内1-4-1	088-873-5118
福岡県	福岡保護観察所	810-0044	福岡県福岡市中央区六本松4-2-3	092-761-6736
佐賀県	佐賀保護観察所	840-0041	佐賀県佐賀市城内2-10-20	0952-24-4291
長崎県	長崎保護観察所	850-0033	長崎県長崎市万才町8-16	095-822-5175
熊本県	熊本保護観察所	862-0971	熊本県熊本市中央区大江3-1-53	096-366-8080
大分県	大分保護観察所	870-8523	大分県大分市荷揚町7-5	097-532-2053
宮崎県	宮崎保護観察所	880-0802	宮崎県宮崎市別府町１番１号	0985-24-4345
鹿児島県	鹿児島保護観察所	892-0816	鹿児島県鹿児島市山下町13-21	099-226-1556
沖縄県	那覇保護観察所	900-0022	沖縄県那覇市樋川1-15-15	098-853-2946

第71回“社会を明るくする運動”作文コンテスト入賞作文集

発　行　更生保護法人　立川更生保護財団
編　集　“社会を明るくする運動”中央推進委員会事務局
製　作　株式会社　双文社

※本作文集の作品を転載する場合は，法務省保護局更生保護振興課に御連絡ください。

令和4年3月発行

人はみな、
生かされて
生きてゆく。
更生保護ネットワーク